

茶漬三略

吉川英治

青空文庫

まさきまごへいじおぼがき
 榎木孫平治 覚え書

人々は時の天下様である太閤たいこうの氏素姓うじすじょうを知りたがった。羽は柴筑しば前守秀吉あたりから後のことは、誰でも知っていたが、その以前の彼を知りたがった。

わけて、小猿とか、日吉ひよしとか呼ばれて、姓さえろくになかった時代の生い立ちを知りたがった。

けれど太閤は、自分の素姓については、生涯、人に語った例がどうもなかったようである。

強いて、訊く者があれば、

「大空に素姓はない」

といったような顔していた。

またその威光を冒おかしてまで、不ぶしつけに訊く者もなかった。う

すうすのことは誰でも察していたのである。

だから彼の祐筆ゆうひつや、松永貞徳なども、やむなく彼の素姓

に筆のふれる時には、

秀吉公、曰く、

われ尾州の民間より出いでたれば、草刈かるすべは知りたれど、筆と

る事は得知らず、ただわが母、内裏だいりのみづし所の下女しもめたりしが、

ある夜のゆめに幾千万の御祓箱みはらひばこ、伊勢より播磨はりまへさしてすき

間もなく、天上を飛びゆくとみて我を懷くわいた胎たいしぬ――

などを書いておいた。

そんな事から、秀吉の母までが、持^{もち}萩^{はぎ}中納言の息女^{むすめ}であつたとか、彼は藪^{やぶ}中納言保^{やす}広^{ひろ}の落胤^{おとしご}であるとか、織田被官^{ひかん}の足輕から歸農した百姓^{やえもん}弥右衛門の子というのが真^{まこと}であるとか、噂や蔭口もまちまちであつたが、それについても太閤はどちらが本當で、どつちが間違つているともいつた例^{ためし}がない。

が——ここにただ一つ、これだけは確實に、彼の口から出て、彼が眼の前で、祐筆に書かせ、公然、四海に闡^{せんめい}明^{めい}したことがあ

る。それは天正十八年に、彼が、朝鮮国王に与えた書翰^{しよかん}で、

予^{ワレ}、托胎^{タクタイ}ノ時二当リ

慈母、日輪懷中ニ入ヲ夢ム。

相士^{サウシ}ノ曰^{イハク}

日光ノ及ブ所

照臨セザルハ無シト。

壯年必ズ八表ニ仁風ヲ熾^{サカン}ニシ

四海ニ威名ヲ蒙^{カウム}ル者

ソレ何ゾ疑ハン乎^カ。

と、自己紹介をしながら、抱負をのべているのである。

結局、太閤となつてからは、彼自身、

「自分は太陽の子である」

と信じて疑わなくなつていたのであろう。

けれど、大空の太陽にも、真暗な泥海時代があつたように、地上の太陽の子にも、暗黒時代があつたに違いない。

そのころの彼が、どんな身なりをし、どんな生活をして、世の暗黒を彷徨^{さまよ}っていたかは、始終彼の祐筆^{ゆうひつ}を勤めている大村由己^{ゆうこ}だの松永貞徳の口や筆などからは、到底知るよしもないことである。

なぜならば、松永貞徳だの、大村由己だのという者自身が、上層階級の武家にばかり拠^よつて生活を立てて来たもので、この世にそんなどん底があることすら知らない人たちだからである。

ところが、広い世の中には、誰か真を知っている者がどこかに

あるもので、ここに、阿波徳島の蜂須賀彦右衛門家政のお抱えよろいし鎧師に、榎木宗一まさきそういちという者があつたが、この宗一の母の口から、ふと、

「そなたの父は、太閤様とは、奇しき御縁があつたお人ぞ」

と、洩らされたことがあつて、それから宗一は、父の素姓を知ると共に時の太閤様の前身にあつた、いわゆる奇しき関係までつい知ってしまったのであつた。

彼の父は、榎木孫平治まごへいじといい、その前身は野武士で、血なまぐさい悪業の数々をし尽し、戦乱の世の暗闇に生きて暗闇へ死んでゆく、多くの無頼ぶらいの徒と同じような運命を辿たどっていたが、ある年、猿めいた面貌おもさしをした貧しい旅の一青年に会い、豁然かつぜんと、

多年の悪夢や迷^{めい}妄^{もう}から醒^さまされて——後に年経て、その時の猿顔の男が、羽柴^{はしば}秀吉と名乗っていることがわかり、隨身^{ひと}して一すじの槍を受け、恩に感じて、後に、彼の馬前で戦死した人であった。

良人の死後、孫平治の後家は、幼い宗一をつれて、叔父を頼って行つた。その叔父は蜂須賀彦右衛門の陣について、のべつ戦士の具足修繕をしていた鎧^{よろい}師であつたから、次第に主家と共に、彼女も阿波へ移つて落着く身となつたわけであるが、老年まで良人の前身や太閤様のことについては、子にもはなしたことはなかった。

ところが、人間は病んで、死期を思つて来ると、いかなる秘密

も誰かひとりには告げておきたくなるもので、ある時、枕元の宗一にすべてを告げて、彼女がいうには、

「わしの料紙^{りようし}笥^{ばこ}の底をさがしてごらん。そなたの父のお書きな

された綴^{とじ}ものが二帖^{にじよう}ある。風を通したこともないから、もう虫

が蝕^くっているかもしれません。こんど雨の夜にでも、そつとここ

へ持つて来て読んでごらん。わたしも眼をつぶつて聞いていまし

よう。……そなたの父^{ててご}御は、乱国の野武士で、文字もろくに書け

なかったお人だから、元より文章も読みづらく、おかしな節々も

あるけれど、人に示そう為でなく御自分の懺悔^{ざんげ}を、真実こめて、

書けない筆でいつか書いておかれた物。……中には私の知ってい

るところもある、足りないところはわたしが話しましょう。わた

しの枕元で読んでごらんなさい」

それから宗一は、母の料紙笥を取出し、母の前で開けてみたところ、果たしてかび黴くさい二帖のとじもの綴文があらわれた。

その夜、彼は、父と太閤との、奇しき前身や縁故をつぶさに知ったけれど、世は治まり、大坂城は時めくそのころ、かようなことは、人に語るもおそ畏れありと、焼き捨てようと考えたが、屋敷ではつい人目があつて果せず、父の忌日きじつに、寺へ持つて行つて、密ひそかに処置を託したところ、寺では正しくまさ護摩壇で焰ごまだんにしてはくれたが、物好きな僧がいつのまにか、それを写して別本をかく秘しておいたらしいのである。

その僧は、杵木家から、寺へ、焼いてくれと持って来た由來ゆらいが書を序文に書きたして、単なる綴とじものを一層書物らしくしてしまつた。文章の余りに稚拙なところや、誤字なども、少しばかり学問のあるまま、つい所々筆を入れたらしく、「開運にちりんしょう日輪抄」と表題まで自分で附けた。——だがその表題の題簽だいせんも、年経て文字もかすかに手摺てずれてしまい、江戸時代になつてから、何代目かの所蔵者が、またその横に、題簽だいせんを貼り加えた。そしてついでに書物の表題も、「杵木孫平治覚え書まさき」と、ありのままに書き直している。

偶然、古書展のたくさんな虫蝕むしくいぼん本のうちから、私の手にこの書が移つたのも何かの機縁というものであろうが、三百年前に焼

かるべき物が、私のような者の眼にふれたことは、野武士榎木孫平治氏にとつては、恐らく大なる不幸を地下で嘆じていることだろうと思われる。かえつて、一方の太閤にたいしてはわたくしは、これを種本として扱うにも、そう冒瀆ぼうとくの罪は感じないのである。なぜならば、彼ほどの人が後世のために、余りに無名時代の自分の経歴を不明にまかせておいた事が、抑 《そもそも》、史家の臆測おそそくを煩わづらわして諸説紛々今もはつきりしない結果になった唯一の原因だからである。

また彼が海外の王へ書翰しよかんしていったように彼自身が、

——われは太陽の子たり

と、かたく信じていたものならば、なおさらのこと、その無限

大の微笑光^{びしょうこう}をもつて、かかる文業^{ふみわざ}も世の草々の一穂^{いっすい}と眺めやるに過ぎまい。

つい「はしがき」が長くなったが。

以下、開運日輪抄の中のはなしを、榎木孫平治氏の口述体を取って、しかし文章はわたくしのものに直し、意識的にぼつぼつ書いて行ってみる。描写その他に、私の想像の繊維も横糸にはいつていることはいわずもがなである。賢明な読者は、疾く^と諒^{りよう}として下されているものと思う。

くらやみの太陽

一

美濃^{みの}の稲葉山の牢に、わしの悪業の終りは来ていた。

天文二十二年のこと。

榎木孫平治^{まさきまごへいじ}という名も、もう何日^{いつ}、この世から拭き消される

かと、観念の日を送りながら、

「榎木孫平治よ。榎木孫平治よ」

わしは自分の名を、日に何十遍も、心のうちで、念仏がわりに
称^よんでいた。

だが、未練*とい*つては、それくらいなもので、もう凶太く観念

はしていた。やりたいことはやり尽したし、親もないし、妻子もないし。

その日はちょうど、わしがこの牢獄へ坐つてから、四百八十七日目だった。

牢獄の中では、一と月とか半年とかいういい方はしない。いずれ打首と覚悟している者は、陽時計ひの陰をみつめているような氣持で。——また再び出られる見込のある軽罪の者は、その反対に一日一日を待つて。——すべて自分らがここへ入つて来た日から起算して、春なく秋なく日数で覚えているきりだった。

この牢の中では、一千六百四十幾日というのが古参だったが、当然、格からいっても、一段高い牢ろうがしら頭の坐るところには、わ

しが坐っていた。

その古参の男は、まんじゅう 鰻頭をお 圧しつぶしたような目鼻に、もじやもじやとひげ 髯が生えて、蜘蛛くも みたいな顔をしているところから、六兵衛と呼ばずに、蜘蛛六とよばれていた。

「やい、小僧小僧。こちらが牢頭様だ。先に御挨拶をしろい」

その蜘蛛六が、わしの前へ、たった今、役人に突き飛ばされて入って来た新入りの、なりの小さな男を引っ張って来た。

「おや、子どもか」

と思つたくらい、この中では、チビな男だったが、顔を見るとふ 老けているし、挨拶もいやに小ましくれていた。

「商売は、何だ」

型のとおり、牢頭のわしから先ず訊くと、

「針売りの旅商人でございます」

と、いう。

「生^{しょうごく}国は」

「尾張^{おわり}の中村でございます」

「年は幾つ？」

「十八になりました」

「名は」

「ございません」

「名のないやつはあるまい」

「あつたそうですが、忘れました。親どもを初め、わたしの顔が

猿に似ているので、猿々とばかり呼ばれて来ましたんで」

猿は、洒然^{しゃぜん}として自分でそういうのである。

「なーるほど」

「似てけツかるわい」

「こいつあ猿だ」

「猿が人間の牢へまぎれ込んで来やがった」

「わはは」

「あははは」

大勢の囚^{めしゅうど}人が、小男の顔をのぞいて、いちどに笑ったので、

牢獄の闇は何十日ぶりで——いや何百日目といってもよいだろう、陽気などよめきに沸^わいた。

こんな笑い声を、牢で聞いたのは、わしも初めてだった。

二

「いったい何をして捕まつて来たのだ。火^ひ放^つけか、窃^{せつ}盗^{とう}か、空^あ巢^{きす}ねらいか」

次に、わしがまた訊くと、

「この岐^ぎ阜^ふの御城下を歩いていたら、淡紅^{うす}梅^{めい}の被衣^{かすき}をして、供の男に塗笠を預け、買物がてら歩いていた奥様がありました。この奥さんだろうか、余りきれいなので、何もかも打忘れて、私は後から従^ついて行きました。——するといつの間にか、道^{みち}を反^それた

供の者が、役人を連れて来て私を指さしたかと思うと、有無をいわさず、引ひつ縛くられてしまいましたので」

猿が真顔で答えると、周まわりの囚めしゅうど人たちもまた、指さし合つて、

「——この顔で」

「女の後を、だと」

「う、ふふふ」

と、前のどよめきが消えないうちに、腹をかかえてまた笑った。けれどその笑いも、井戸へ石を落した水音のように、やがて、はたと沈んじまい、前にも増して、陰気に返ってしまうのだった。猿もそうだった。

牢の隅に、ちよこなんと胡坐あぐらを組んで坐つたまま、毎日毎日、

それから余り口をきかない。

わしを始め、この中には、強盜強姦、追剥おいはぎ火放ひつけ、ありとあ

らゆる罪を犯した兇悪な人間もいるが、その中へ間違つて紛れ込まぎんで来た猿は、まだ掻かツ払ばらい一つろくに知らない初心うぶな奴だった。

だから定めし、まだ馴れない牢獄が怖ろしいのだろう。——
う察して、ある時わしが、

「猿、猿。てめえはきつと、すぐ御放免になるだろうぜ。だから
余り心配するな」

慰めてやると、猿はふり向いて、にやりと、
「はい。そうべつに、心配はしておりません」

と、いう。

「じゃあなぜ、身動きもせず、毎日眼をふさいだきり、黙っているんだ」

「でも、眼をあいていても、この牢獄では何も見えませんもの。

——反対に、じつと眼をふさいで、心を澄ましていれば、身はここに置いて、世間の何でも見えて来ます」

「世間が見えるって？」

「え。この岐阜^{ぎふ}の御城下でも、生れ故郷でも、広い天下の何処へでも、行きたい所へ行ってみる事ができます。会いたいと思うお母さんでも、話する事ができるんで」

「嘘をいえ」

「ほんとですよ」

猿はまた、眼をふさいで、乞食坊主が坐禅でもするような恰かつこ好うして、大真面目になっていた。

三

「こいつ少し気が変だな？」

わしは領うなずいた。ここへ入って来た当座、気が変になるのは、猿ばかりではない。誰でも一応は、泣いたり喚わめいたり、黙りこんだり、狂態をやる。

ところが、この狂態を、今度はわしがやりそうになって来た。

——というのは、猿めが、母親の事をいい出したからである。永い間かかって、やっと忘れていたものを、猿のことばで、ふいとまた、思い出し始めたからである。

わしが死んでも、誰ひとりこの世の中で泣く者はあるまいが、おふくろだけは、どんなに……などと、考えても追いつかない事を悩み出すと、

（ああ、もう一遍！）

おふくろの顔が見たい。世の中の光を浴びたい。——いのち生命が惜しい。たまらなく物狂わしくなつて来る。

（戦争でもおつ始まれつ。稲葉山の城も、岐阜の城も、火の海になつてしまえつ）

そうしたらどうか今の境遇に変わりが起りはしないかなどと、妄想にばかり苦しめられて、夜眠つていても、

(おつ母^{かあ}つ。おつ母つ)

大きな自分の声に、眼をさました事などもあつた。

——だが、こいつは牢の中では禁物だった。強悪無類の牢^{ろうがし}

頭^らたるわしが、そんな弱音を顔いろに現わしたら、たちまちまわりの狼^{おおかみ}どもに舐^なめられてしまう。

「やい、どいつか、おれの肩をすこし揉^もんでくれ。蜘蛛六^{くもろく}、汝^{われ}でもいい。うんと力を入れて……そうだその辺を」

蜘蛛六に肩を揉ませながら、猿のほうを見ると、猿は、朝の稗^ひ飯^{えめし}を食べてしまうと、例の如く独りだけ隅^{ぐも}ツこにいて、達磨^{だるま}の

まねをしている。いるのだから、いないのだから分らない。

他の者は——といえ、ちやうど何日もの時刻で、一つ所に泥^ど鰯^{じょう}のようにかたまり合っていた。

牢は三間と二間半の頑丈な壁で出来ていて、明り窓は、たった一つ、壁の高い所に四角く切つてあるだけだった。勿論、その明り口にも、頑固な棧^{さん}が打つてあるので、大きな光は映^ささない。

しかし、晴れた日には、太陽がこの牢獄の上を越える一刻^{いつとき}か半刻ほどの間ちやうどその切窓の棧から、幅一寸ぐらいな日光が、短い光線の棒をならべたように、牢の板の間に映^さすのだった。

すると囚^{めしゆうど}人たちは、われがちに、その僅かな太陽の光を取

囲んで、爪の伸びた足の先だの、蠟ろうみたいな青い手だのを差し伸べ、

「アア、お太陽てんとさまだ」

「陽の光だ……」

眩まぶしげに、見入っているだけでも、無限に楽しめるように、この陽なたの翳かげるまでは、誰ひとり動こうとしなかった。

ある者は、その光で虱しらみをつぶし、ある者は悪党のくせに、合掌している奴もある。

娑婆しゃばが曇っている日のほかは、毎日の事だった。もし誰かが、

一枚の板を切窓の外から打ちつけて、獄人どもからこの一つの愉快を奪ったら、それだけでも、中の人間はみな自然萎しぼみ死しんでし

まうだろう。

だが、猿だけは、一度もまだその仲間に交じらないので、ある時、蜘蛛六が、

「おい猿、おめえにも少し、天道さまをお裾わけしてやるから、こつちへ来ねえ」

と、声をかけると、

「いえ、たくさんです。私にはいつも陽が当たっていますから」と、猿がいった。

「嘘をいやがれ。どこに陽が当たっている。唐変木め」

「でも、私には、腹ん中に、天道様があるんで、腹ん中の天道様は、晴も曇も、暗闇ありませんからね」

「法螺ほらも、そこまでふけば、罪はねえ」

蜘蛛六は、手洩てばなをひツかけるような顔して嘲わらったが、何ぞ知らん、それから五十日、百日と日が経つうち、いつか猿はこの獄内で、ほんとに闇を照らす太陽になってしまったのである。

——それは後の事だが、その時、蜘蛛六が、法螺をふくなど嘲うと、猿はぬつくと立つて、

「法螺だもンか。お前らだって同じことだ。人間はみんなお天道てんと様の子だ。心のなかに、太陽を持っている。気がつかないだけの事だ。暗いというのは眼だけの事だ。心にある太陽に気がつけば、暗いことなんかちつともない。明るい明るいとても明るい！ わけてこの牢屋の中には、悪人なんか一人もいやしない！ こんな

明るい所にいて、暗いとは一体どうしたものだい。あはははは」
何が愉快なのか。猿は手をたたいて笑った。

皆、呆^あツ氣にとられて、猿の顔を見まもったが、その日から何だか少しずつ、ここの闇が明るくなり出した。

四

黙っていれば十日でも黙っているが、喋^{しゃべ}舌り出すと、猿は、いくらでも喋^{しゃべ}舌つてやまなかった。

また、何でも知っていた。

仏法の話をするれば、下手^{へた}な説教坊主ぐらいはやるし、諸国のう

わさをすれば、越後はどう、甲府はどう、小田原はどう、この岐阜の稲葉山はこうと、人情風俗、物価の高低から、百姓の生活向^{くら}きまで——わけて自分が百姓生れなので、最も詳しい。

また。

駿河^{するが}の今川家は、財政は豊かだが、大将の今川義元始め、土^{さむらい}がみな、京の公卿^{くけ}風をまねして遊惰^{ゆうだ}だとか。三河の松平家は、今では駿河の属国^{きも}になっているが、三河武士がみなよく貧苦に耐え、胆^なを嘗^ため薪^{たきぎ}に臥^ふして、時勢の変るのを待っているから、十年先には、どう変るか知れないとか。

諸国の武将のはなし、兵法のことでも、訊かれれば、知らないという事はない。

「ふくぞ。こいつが」

と、初めは皆、小馬鹿にしながら聞いているうち、何かしら、猿の持っている信念というようなものが、皆の身に沁^しみて来て、時には感心し、時には笑い、時には怒って、

「猿。おめえは、何でもねえ罪だから、打首になるはずはねえが、成るべく長くここにいてくれ」

冗談にも、猿が出て行ってしまったら、どんなに淋しくなるだろうと、その日を惧^{おそ}れるくらいになった。

そして何かといえは、

「猿。猿」

と、彼を取巻いて、話を求めた。——毎日、高い切窓から射^さす

僅かな陽^ひなたの切れ端と同じように、彼を囲み、彼のことばに随喜した。

それとまた、何よりここの変つて来た事は、陰気な牢内が、いつのまにか陽気になつて来た事だった。猿はよほど陽気な性^{しょう}とみえ、どんなに皆が陰気になろうとしても、猿の声がしだすと、そこに笑い声が起つた。いや黙つて坐っているだけでも、猿の姿を見ると、陽気^{ただよ}が漂つて、自ら^{おのずか}皆の顔まで明るくなつた。

自然に、猿は、尊敬と愛慕^まの的になつた。反対に、牢頭のわしの威光は、僻^{ひが}みか知らぬが、以前のようでなくなつた。わしは事々に猿^{なぐ}へ辛く当りちらした。些細な落度を、威猛^{いたけだか}高^のに罵つて、猿を撲^{なぐ}らせたり、蒲団^{ふとん}縛^{しば}りにして飯を食わせなかつたりした。

だが、そうすればする程、牢内の人気は猿へ傾いて行く気がした。
「牢頭ろうがしら、二、三日経つと、私たちは一遍、牢を出されて、世間の風にふかれる事ができますね」

ある時。

猿に腰を揉もませていると、猿がそういった。

嘘にでも、そんな話は、わし達の胸をどきつと打って、

「えっ。どうして？」

「何だか、そういう気がするんで。——というのは、ゆうべも一お昨日とといの晩も、御城下で戦争があつたと私は思いますから」

「ふム……。どうしてそんなことが分るか」

「夜中に、あの切窓の隙間から見える空が、毎晩、赤く見えまし

た。それから、獄人^{ごくじん}へ配つて来る飯の時刻が、遅かったり早かったり、狂つて来ました。また、じつと眼をつぶつて、外の氣配に氣を澄ましていると、どうしても戦争か何か起っているふうです。——稲葉山の齋藤義龍^{よしたつ}と、鷺山城の齋藤道三秀龍とは、表面は父子^{おやこ}ですが、実は義龍は、道三が殺した旧主の子だという事です。から、また内乱を起しているにちがいありません」

こいつがまた、いい加減な小才を振廻して、他の者^{ほかもの}らに、氣を持たせていやがる——と、わしはいつもの癖^{ひが}みで、

「馬鹿あいえ。ここにいて、世間がそんなに見えて堪^{たま}るものか。ムダ口を叩かずと、もつと力を入れて腰を揉^もめ」

と、叱りとばした。

ところがその翌々日。役人衆が五人見えて、

「牢頭。今日より獄人どもに四日間ほど、労役申しつけるゆえ、左様心得ろ」

犬いぬくぐ潜りの口から、わし達は外へ出された。一イ二ウ三イ四ウ

……と頭数を数えられて、

「十九名だな」

「へい」

「逃亡などたくむ者は、即座に突き伏せるから心得ておけ」

役人衆は、素槍の先を、獄人たちの鼻の先へひけらかしていた。驚いた事には、猿のことばが、あたっていた事であった。役人

衆は勿論のこと、牢番までが具足を着ていた。世間には、戦争が起つていたのだ。

わし達は皆、何百日目で広い空を仰いだ。金華山きんかざんの上のお城を見た。稲葉山の城である。

城は依然としていたが、奉行所の外門は、焼けていた。近所の侍屋敷から河向うの町家も、所々、焼け跡になっていた。

獄人は、わしらばかりではない。他の牢ほかからも労役に出たので、

二百人近くもいた。仕事は、焼け跡の灰片づけであつた。味方の死骸や、敵の死骸が、灰の下から幾つ出て来たか数知れなかった。

すると三日目の午ひるごろ。戦後の焼け跡を、騎馬で視察に来た斎

藤家の侍頭さむらいがしらが、

「や。猿じゃないか。どうしたのだ貴様あ」

と、驚いた顔して、働いている獄人たちの中から、猿を呼び出して、しばらく馬上から何か訊ねていた。

後で聞けば、その士大將は、さむらい尾張海東郷かいとうごうの野武士あがりの者

で、猿が同じ土地の蜂須賀村はちすかの野武士、小六という者のやしきにいたところに知っている人だった。

——だが、その時は、わしはじめ、皆目をみはって、

(どうして猿が、あんなお士と知さむらいっているのか)

と、びっくり吃驚したものだった。

だいにちご
大日越え

一

四日間の労役は楽しかったが、それが終ると、わし達はまた、以前の常とこやみ闇の沼みたいな牢へ帰って、盲の魚のようにうようよしていた。

牢へ帰った翌日、猿は皆へ向って、

「わたしも近いうちに、いよいよ、皆さんとお別れする事になった。何日いつまでもお前方と一緒に暮してたいが、そうもいかないからなあ」

と、いった。

猿が侍大将と親しそうに口をきいた事を、わし始め見たので、誰も、疑わなかった。

「いよいよ、お別れか。ああ……」

「名残惜しいなあ」
なごり

「羨ましいなあ。だが、おめえのためには、よろこ欣ばなければならぬ
いが」

ある者は、涙をながし、ある者は、猿の手を撫でたり、改めて顔を見たりした。

翌朝。役人が、猿を呼び出しに来た。すると牢内は総立ちになつて、猿に名残を惜しみ、猿の手を容易に離さなかった。

「まだ早いよ。わたしはもう一遍、牢内へ帰つて来るよ。わしは

かり幸福になつちや済まないからなあ。兄弟同様に暮したお前方にも、欣びを頒^わけてやるよ」

そういつて出ていったが、おそらく猿はもう帰るまい——と、猿を失つたそれからの半日ばかりは、墓場のように滅^{めい}入^いつて、誰ひとり口をきく者もなかった。

だが、猿はまた、歸つて来た。そして蜘蛛六^{くもろく}にいった。

「お前さんは明日^{あす}放免されるよ。お前さんは善人だ。二度とここへ来るじゃないぞ」

蜘蛛六は、嘘をいわれたような顔して、本気で聞かなかつた。けれど半分は本当かなと思つたのだらう、一晩中、身をうごかして、眠れなかつた様子だつた。

猿のことは、嘘でなかった。蜘蛛六は翌日、放免になった。狂氣した蜘蛛六は、皆へ挨拶するのも忘れて、飛び出して行つたきりになつた。

それから、二、三人の者に、放免を予言した。皆、猿の予言どおりの日に出て行つた。

羨望せんぼうと驚きで、牢内は動揺した。もう牢頭ろうがしらのわしなどは見向きする者もなく、

「猿。おれは、何日いつ出られるんだろう」

「猿。おれは追剥おいはぎをして捕まつたんだが、免ゆるされるだろうか」

「おれも、打首にならずに、助かるだろうか」

地蔵の来迎らいごうへ縋すがる餓鬼がきのように取巻いて訊ねた。

「出るよ。出るよ。おまえ達の心さえ正しくなれば、自然、助かるよ。だがわしも明日あすは七日目になるからな、明日こそは本当のお別れになるぜ」

牢頭という沽券こけんの手前、わしもその日までは、猿に対して、白眼視していたが、猿がほんとに、明日限りこの牢から姿を消すかと思うと、堪たまらない淋しさと絶望さいなに虐いまれた。

真夜中だった。

わしは、皆が眠り落ちたところを見すまして、そつと、猿を揺り起した。

「おい。おい。ちよつと起きてくれないか……」

猿は起たつて、真暗な中に坐り直した。わしも畏まって、その時

ばかりは真実の涙を流していった。

「猿……。俺はな、誰にもいった事はないが、故郷くにもと元に不孝を重ねたままの母親を一人残してある。わしはもう一遍、その母親の顔を見られるだろうか？」

二

猿はしばらく考えていたが、わしの思いつめた眼をじつと見て
 — 他ほかの者が眼をさまさないようにと憚はばかるらしい小声で、

「——見られるよ、牢頭」

「えっ。……。ほ、ほんとか」

「ただし、今までのような悪心を持っていては難しいが」

「ああ。そういわれれば、俺はこの獄人の中では愚かな事、どんな悪党のなかへ顔を出しても、負けを取らない強悪な男だからな。
おちゅうど おいはぎ
落 人の追剥、あちゆる戦場稼ぎ、火放け殺人誘拐し——
い く さ ば か せ
やらない悪事はないくらいだからなあ」

「十悪の兇賊でも、心を改めれば、即座に仏になれると、何とかいう坊さんが説いているよ」

「心を直すには、どうしたらいいのだい」

「悪い事を、悪いと知ればいいのさ」

「それはもう毎日毎日思っているんだが……」

「それならば、きっと助かるに違いない。……そうだな、わしが

出てから十八日目にお前さんもきつと、この牢を出るだろうよ」

「十……十八日目？」

「ウむ」

「猿。……気休めをいうのだろう。どうして俺が」

「信じているがいい。だから、それまでの十八日間、牢頭は毎日、天地を拝んで、自分のしてきた罪業を懺悔ざんげしなさいよ」

「もいちど、この生命いのちが助かるものなら……ああ俺は、もいちど生き直って、今度は善い事ばかりしたい。……猿、もしかほんとに、世の中へ出られたら、何処かでおめえに、会う事ができるだろうか」

「さあ、それは分らない」

「おめえの故郷^{いなか}へ訪ねて行つたらどうだろう」

「故郷の家でも、わしが何処にいて何をしているか知らないよ。

どうにか、人並に家を持ち、御飯がたべられるようになるまでは、母にも知らせないつもりだ」

「じゃあ、おめえが、一人前になれば、自然分るわけだな」

「それは分らずにはいないだろう」

「もし、生命^{いのち}があつたら、訪ねてゆくよ。それにしても、猿とだけでは心細い。何とか名があつたら、訊かしてくれ」

「尾張中村の木下弥右衛門^{やえもん}の倅^{せがれ}といえ、わしだけしかない。名は、日吉^{ひよし}というのさ」

「弥右衛門の子の日吉か。きつと覚えておく。……それから俺^{わし}の

名も覚えておいてくれ」

「あ。聞いておこう」

「俺^{わし}は、^{まさきまごへいじ}榎木孫平治 といつて、親父の代から都を落ちて、二代つづきの美濃^{みの}の野武士。しばらく戦^{いくさ}が絶えたため、衣食に困つて、この稲葉山のさる武家屋敷^{うまや}の厩^{うまや}へ、馬盗みに入つて逃げ出したところ、そこ^{いそろう}の食客^{いそろう}の十兵衛という男に馬で追いかけて捕まってしまった、その場ですぐ奉行へ突き出されてしまったのだ。……馬泥棒だけなら助かる望みもあるが、何しろ前科を洗われれば、首が十あつても足りねえ体だからなあ」

さだめし見つともないざまに見えたらうが、まったく、夢かわしは驚いたのだ。しかも、猿が出てからちようど十八日目である。

「榎木孫平治に、放免申しつける。ただし御城下十里外へ、御追放の事」

役人からいい渡された時、わしはどんな声を発したか、どんな顔をしたか覚えがなかった。

手の舞い足の踏むところを知らず——という言葉どおり、奉行所の門から世間へ素ツ飛んで行つた。いつか先に蜘蛛くもろく六が放免になつた時、

（あれほど牢内では目をかけてくれたのに、出るとなると、挨拶も忘れて行きやがった）

と、憤^{おこ}つたが、自分がその身になってみると、やはり蜘蛛六と同じ事をしていた。

わしは長良川^{ながらがわ}の上流を、十里余も溯^{のぼ}つて、たつた独りの老母^{おふく}がいる関^{せき}の宿^{しゆく}の在^あ、下有知^{しもずち}という草ぶかい田舎^{いなか}へ一本槍に帰つて来た。

わしの姿を見た時の、その時の老母の欣びよう。それは生涯、眼から消えなかった。

獄舎の中で、熊みたいに生^はえた髯^{ひげ}を、まず剃^そり落したが、その髯の毛を紙につつんで神棚へ上げておいた。

そして毎日、

「忘れませんように」

と、自分の髯を拝んでいた。

月日が経って、ようやくわが身に返るにつれ、わしにも猿殿に
対する敬慕が強くわいて来た。

考えてみれば、今の身があるのも、猿殿のお庇^{かげ}だ。ぜひ一度は
巡^{めぐ}り会って、真人間になった自分を見せて上げなければ済まない。

それにしても、猿殿はいつたい、どうして、あんな予言をした
ものか。初めは、猿殿に何か神秘的な靈力でもあるのではないかと
いう風に考えていたが、それも猿殿の慈悲のほか何ものでもない
事が後に知れた。

一年余り過ぎてからの事。岐阜^{ぎふ}の里まで用事があつて出向いたところ、すぐ木戸の役人に見咎^{みとが}められて、

「そちは御城下十里四方お構^{かま}いの孫平治ではないか。いくら改心してもお免^{ゆる}しの出ないうちは、御城下に立入る事ならん」

と、叱られた。

その折、入牢中、顔を見知っていた役人衆がいて、

「孫平治、貴さまはよくよく幸運な奴だぞ。あの折は、猿によう似た男が御家中の杉坂内匠^{たくみ}様をよう知つておつて、内匠様のおこ
とばで、猿はすぐ御放免となつたが、彼の猿めが自分の身は、どう
うなと宜^{よろ}しゅうございますから、誰と誰とは、心が善だし、親も
ある者ゆえ、免して下されと、泣かんばかりの嘆願だった。――

そして貴さまの事は、最後に牢を出る時、再び杉坂様に縋^{すが}つて、死を賭^としてお願いしたらしいのだ。杉坂様も、その熱情にうごかされて、お奉行や重臣たちへお骨を折り、運よく、そちは御助命となったものだが、猿めは、そう極ると、ただ御追放してはいけません。てまえが出牢した日から十八日目に出してやって下さい。その間に十分善心に立返るようにしてありますから——との事で、その通りに御放免になったわけだが」

それで猿殿の予言したわけは解けたが、そう聞いてから、わしは一層、猿殿に敬慕を増した。神秘の靈力を備えている非凡人よりも、猿殿の人情に打たれてしまった。赦^{しやめん}免と聞くなり、後に残る獄人たちへ、挨拶もわすれ、手の舞い足の踏むところも知ら

ずに、山へ行く人間とは——わしなどとは、格段のちがいのある人物だという事が、後になるほど分つて来た。

で——

「何日かは一度」

と、再会の日を心に誓い、忘れたこともなかったが、遠国へ行く事は、老母おふくろの為に思い立てず、つい月日を過していた。

その老母はまた、わしが家へ帰ってから程なく床につき、わしは獵師りようしや百姓仕事をして食っていた。どんなに飢えても、ふしぎな程、以前の悪心はもう起らなかった。以前の自分を思うと、自分でないような心地がした。

すると丁度その年。——その年は弘治こうじ二年で、もう毎年の雨期

に近い五月の初めだった。

真つ暗な雨雲の空が、宵よいの口から真つ赤になり出して、長良ながらが

川わの下流の方は、夕焼を見るようだった。

「戦いくさじゃぞ。こんどのは、大きい戦らしい。この辺の者も、今の

うち、家財を纏まとめて逃げぬと、逃げはぐれようぞ」

夜半よなかに、村の者は、お互いの戸を叩き合つて迫つた。

わしは、病人の老母おふくろをかかえているし、戦の火など見ると、

かえつて性根しょうねが据すわる質たちなので、

「なあに、大した事はないよ。おつ母さん、俺がついている限り、

案じなさんなよ」

枕元へ坐つて、母へはそういったが、腰には、野太刀をさし込

み、側には古びた手槍一筋寄せて、ひさし廂ごしの赤い空を見つめながら、夜明けまで坐っていた。

四

夜明け頃からひる午頃にかけて、手負いの血まみれ武者や、よろい鎧に焼
け焦げのある士だの、さむらい担がれたり、かつ槍杖をついたり——何しろ七、
八百の兵が、村を通過した。

いなご蝗が通った後みたいにな、その日だけで、村の食物は失くなつて
しまった。もつとも老人や子供や百姓のあらかたは、もう山越え
して、何処かへ逃げてしまつてはいたが。

「罰あたりめ」

「いかに、御不和な仲とはいえ」

「親と名のついた山城守様を、子の義龍よしたつが討つて殺すとは」

「極悪人の大将である」

「人倫じんりんの賊。天も憎み給うであらう。ああ、浅ましい」

「山城守入道どのの、悪い報いか。わが子と名のついた義龍に討たるるとは」

「怖ろしい輪廻りんねか、宿業しゆくごうか」

落ちてゆく武者たちは、口々に、憤怒の声を放っていた。

かねてから鯁すえていた国主の内輪揉めうちわもが、遂に、大乱となつて、

稲葉山の斎藤義龍は、父と名のつく鷲山城さぎやまじょうの山城守道三を、

ゆうべ一挙に攻めて道三の首を挙げたものと——わしもその日の夕方にはやつと知った。

「何たることだ！」

わしのような者でさえ、それを聞いた時は、憤りに耐えなかった。人間の敵に対するほど、人間の怒りを覚える事はない。

これを思えば、四年前にいた牢の中には何たる善人ばかりが集っていたことか。——あの中でいちばん強悪無類だといわれていたわしでさえ、道三父子には、どっちもどっちだなと、堪らない憎悪を感じた。

戦は、その日や次の日ぐらいでは、熄まなかった。

何しろ美濃は大国である。駿河の今川家に次いで、の兵力財力が

あつた。醜い骨肉の戦乱のために、その財力も、その兵力も、燃やし尽してしまわないうちに、天も火を鎮め給わぬかのように、毎晩、赤銅あかがねのような空をしていた。

それはいいが、遂に、戦争は近くの関せきの宿しゆくから、この下有知しもずちまで飛火して来た。長良川を溯のぼつて攻めて来た稲葉山の兵は、下有知の民家へ火を放つけやがつた。意地にも坐まつていらなくなり、わしは老母おふくろを背中へ背負おつて、火の粉や銃つ音おとの中を、駈け出した。

「もう駄目だ」

森も焼けている。麦も蹴けちらされている。わしは末期まつごの村を見た。火を噴ふいていない家はない。

「ちえつ、こんな国主の下に、いてやるものか。そうだ、山越えして、越前へ出よう」

両軍の陣は、ちょうど、火になっている下有知を挟んで戦っているらしく、どっちへ行っても陣があつた。無数の死骸が捨てられてあつた。

やつと、安曾根^{あそね}の溪谷まで逃げて来た。そこはもうかなり高いので、両軍の形勢が一目で分つた。そして、山城守道三が、全面的に、もう敗北しているのが分つた。

遠い山から、炭焼小屋でもあるように、煙がのぼっていた。それは皆、道三方の与党の城が焼けているのだつた。

「どっちが勝つても、こんな事じゃあ、どっち途^{みち}、長持ちする国

じやあねえ。焼けろ焼けろ、もつと焼けろ」

何の未練もない気がした。だが、背中の老母^{としより}にしてみたらどう

だろうか？

ふと、自分の背を、肩ごしに覗いて、

「なあ、おふくろ。俺あこれから、越前へ行こうと思うが、おふくろはどう思う。越前は朝倉家の領分だから、あそこなら穏やかで、新しい魚は食えるし……。嫌かね、どうだね。……。ええ、おふくろ。……。おやつ？」

わしは仰天した。

肩を揺すぶると、母の首は、わしの肩から力なくぶら下がった。眼をふさいで——唇から血の糸を引いて。

老母は流れ弾にあたつて、いつの間にか死んでいたのでした。

五

わしは幾日も冷たい空骸を背負つて歩いた。夜は抱いて山に寝た。

いくら肌寒い山中でも、三日も経つと死臭を放ちはじめたが、それでも母の死骸を捨てきれなかった。

大日岳へかかった。

屍体の肌は、もう葡萄酒色になっていた。わしは、わしの愛執のために、老母のそうした醜い顔をいつまでもこの世に曝

しておくのを罪深く思った。

清浄なひのきばやし檜林を見つけた。わしは老母おふくろの空骸なきがらを千年苔ごけの

下に埋めた。鋤くわは近くの小挽小屋こびきから借りて来たものだ。手から鋤を捨てるとわしは両手をつかえ、親というものへ、生れて初めて真心と形との一つになって、ほんとの頭を下げ切った。

「……………」

鳥の音が澄んで透とおる。とめどなく涙があふれ出て止まらない。三ツ子のようにわしは嗚咽おえつしていた。

——すると誰か後ろで咎とがめた者があつた。わしはあわてて泣き顔のやり場を失い、鋤を拾って檜林へ逃げ込もうとした。

「土民つ、逃げるには及ばぬ。恐ろしい者ではない。越前へ越え

る道を問いたいのじゃ。待て、待てっ」

呼び返されて、わしは振向いた。二人の落武者が手を上げている。

落ちうど

人と見れば、以前はすぐ、稼ぎの鴨を見つけたように、

兇悪な胸算用を立てながら猫をかぶっていたものだ。

そのわしを見かけて、恐ろしい者ではないと武者がいうのを見れば、わしも今ではよくよく善良な土民と人目にも見えて来たのである。

「あ。……お侍様。何ぞ御用でも」

「されば、道に迷うて、ここまで来たが、越前へ下るには、どう参つたらよいか。越前路の大日越えは、どの方角にあたろうか」

「ここがもう、大日道でございます」^{みち}

「では、いつの間にか、大日越えへかかっていたのか。——^{みつは}光
春、武運はまだ尽きたとは見えぬぞ」

ニコと笑って、一人は連れの武者を顧みた。

「ここまで参ればもう大丈夫……」と、ふたりは苔^{こけ}の上にどかと
坐り、手足の傷口を縛り直したり、具足を脱いで、腹巻を締め直
したりしていた。

ふたりとも、非常に疲れている容子だし、空腹でもあろうとわ
しは察して、鍬を返しに行つたついでに、木挽小屋^{こびき}から食物や湯
など貰つて来てやると、二人は欣んだが、食物には手をつけず、

「そちは此処の土へ、一体何を埋めたのか」

と、土色の変っている所を指して訊ねた。

わしは包まず仔細をはなした。すると初めて、疑いを解いたらしく、

「左様であつたか」

「不愍^{ふびん}な事をしたのう」

と、食物もたべ、湯も口にして、なおいろいろな事を訊ねた上、わしの人間を見届けて安心したものか、

「実は、われら兩名は、斎藤山城守様に隨身の者だったが、義龍との一戦に敗れ、これより越前の穴^{あな}馬^{うま}まで、知る^し辺^べを頼つて落ちてゆくところ。——そちも同じ途中と申すし、寄^よる^べ辺^べもない身の上とあれば、幸い、ここよりわしらの供をして参らぬか。落着

いた上は、若党として召使つて遣わそうが」

わしは、結構なはなしだと思つて、即座にお願いした。そこで二人の御主人は、花やかな鎧具足よろいぐそくを着けて歩いていては、人目につくからと、二領の鎧を脱ぎ重ね、それを旗で巻いた上、さらにむしろ蓆ぐるみにして、わしの背へ担になわせた。

旗には、桔梗ききようの紋がついていた。

年上の主人は、二十九歳だとかで、眉目びもくし秀麗ゆうれいで、智慮ぶかい眸めをしていた。

名は、後で知つたのだが、明智あけち十兵衛光秀といい、山間の小城ではあるが、きのうまでは、美濃みの明智ノ庄の明智城ねしの主だつたお方である。

もう一人は。

十兵衛様の従兄弟いとこにあたり、四ツほどの年下で、斎藤山城守の老臣、明智光安の子で、左馬之介光春とおっしゃった。

世の中というものは、つくづく怖い。その時はまだ、どっちも気がつかずにいたが、やがて越前の穴馬まで、辛苦を共にして落ちて行くうち、ある夜山家の炉辺ろへんばなしのうちに、端はしなくもこの十兵衛光秀とわしとは、初対面でなかったことが明らかになった。四年前に——あの岐阜の牢へ捕われた動機というのは、わしが馬泥棒に入った時、その邸の食客殿に騎馬で追いかけられ、そのまま奉行所へ突き出されたためだった——何と、その時の若い食客殿こそ、十兵衛光秀様だったのである。

わしは、十兵衛様の、何事をも見通すような深い眼を仰ぐと、到底かくしていられなかつた。

で、ある時。

「実は……」

と、その事から、前身の罪業まで、残らず有^{ありてい}態に自白してしまうと、

「そうか。そんな前身もあつたのか。ならば修行ひとつで、戦場でも一かどに働ける男になれよう。僻^{ひが}まずに、なおなお、自分を磨^{みが}き直す事を心がけたがいい」

と、光秀様のおことばだった。わしは身に過ぎた主人に御縁を持つた事を、天地に感謝した。平時なら側へも寄りつかれぬ人の

郎党となつたのである。しかもその主人は、人なみ優すぐれた器量と
 学識をもち落おちゆうど人の境遇でこそあつたが、わしらのような卑いやし
 さなく、何処へ出しても一いっぽう方の大將として恥かしくない人品と
 骨こつがらをも備えておられた。

ひら ききよう
 開く桔梗

一

越前の穴馬あなうまには、六年間ほど、郷士として蟄ちつぷく伏しておられ
 た。その間に光秀様はわしを連れ、諸国を武者修行に歩いては、

また、穴馬へ帰っていた。

従兄弟いとこの光春様は、他家を頼つて、もうその土地にはお在でがなかつた。六年の牢人暮らしは、随分、貧乏に苦しめられた。しかし、光秀様は、いつも書を読み、大志を養い、少しも貧乏くさくはなかつた。

「さすが、氏うじ素姓すじょうのちがいは争えぬ」

わしは、いつも思った。知らぬ間に、主人自慢になつて、

「おれの御主人は、いつまでも、こんな草深い田舎に埋うずもれてい
るお方じゃないぞ」

と、大言した。

人もまた、わしの大言を、

「何をいうか」

とは囁^{わら}わなかった。むしろわしの自慢以上に、称^ほめ讃^{たた}えてくれた。世辞でなく、穴馬の町民や土民は皆、光秀様に心服していた。越前^{いちじょうだに}一乗谷の太守は、人も知る朝倉義景公だった。度々、その一乗谷から、乗物を持って光秀様を迎えに来た。

鳥甲斐^{とりかいげき}外記だの、岩佐壺岐^{いさき}だのという重臣たちも、度々、浪宅へ遊びにみえた。元より遊びは表面で、雑談の末には必ず、

「義景公に仕えるお心はないか。禄^{ろく}はどのようにも、われらからお望みのほどを、口添え申すが」

などといわれた。

最初は、断っておられたが、懇^{こん}請^{せい}もだし難く、光秀様も遂に

廬^ろを出で、朝倉家に隨身なさる事になった。

御主人の出世につれて、わしも一乗谷の御城下へ移つてからは、侍らしい侍になった。労苦を共にした効^かいあつて、

「孫平治。多年貧乏苦勞をさせたが、これからは、そちにも一か^{ひと}どの供や馬ぐらいは持たせてやるぞ。——だが、人いちばい無学の其^{その}方、よほど修養を心がけぬと、主人のわしが立身してゆく後に従^ついて参れぬぞ。追いついて来い。懸命に勉強して」

と、よくおっしゃった。

だが、わしにはとても、御主人の真似はできなかった。

朝倉家へ隨身されてからでも、御主人の勉強ぶりといったら生^{なま}やさしいものではなかった。一、二年のうちに、書物はお部屋を

埋め、新しい武器——わけて鉄砲に関して、その製造法から撃ち方、火薬についてまで、どんな学者も兵法家も及ばないほど研究なされた。

「孫平治、寝てもよい。もう寝^{やす}め」

と、仰っしやった後でも——夜半^{よなか}にふと窺^{うかが}つてみると、御主人の部屋だけには灯^{とも}がついていた。

いったい、あんなに書物を読まなければ、人間というものは、一人前になれないものか。偉い武将にはなれないのか。さてさて、修養というものも、大へんなものではある。——と、魯鈍^{ろどん}に生れたわしなどは、御主人の余りな精進に、むしろ胆^いがちぢまつてしまう。

しかし――

余りに光秀様の聡明な眼や学識のある弁才は、朝倉家の家中では、かえって冷たく見られたらしい。なぜなら、その頃、太守の義景公を始め朝倉家の家中というものは、非常に紊みだれていた。国主の閨門けいもんが、権勢を持っていた。家中の士は、華美でおべっかで、本願寺の門徒衆とは、たえず小戦争こぜりあいをやったり、妥協したり、陰謀が曝露ばくろされたり――どうも始末が悪かった。

「長くは留まる国でない」

光秀様は、時折、嘆息した。今さら悔いておられるらしく、楽しまない日が多かった。

折ふしここに、御主人の憂愁ゆうしゆうを開く人があらわれた。

室町將軍家の管領の家すじ、細川ひようぶだいふふじたか兵部大輔藤孝というお方
だつた。

二

三好一族の叛乱にお趁われて、將軍よしあき義昭公は、諸国を亡命して、
逃げあるいていた。

わかき若狭の武田よしむね義統を頼つて、亡命將軍の一行は、

「いかに京都をとりかえ奪回するか」

と、諸国の武將のたの頼みが効いある者を、物色していた時なのであ
る。

「朝倉家こそは」

と、お味方と見込んで、細川殿は將軍家の旨を帯び、その交渉に幾度となく、一乗谷の金ヶ崎城^{かねさきやう}へ見えられた。そしてわしの御主人とも、御懇意になった。

義景公は、亡命の將軍家へ、欣んで加勢を承諾されたが、朝倉家の内情は、前にもいったとおりなので、その後將軍家が身を寄せられても、賢明な細川藤孝殿は、すぐ、

「これは頼りにならぬ」

と、察してしまい、とかく去就に迷っている月日がかかなり長かった。

その結果、細川殿は、朝倉家の家中のうちから、ただ一人、明

智光秀という人物を見出され、頼みがいある者と思われたか、人目忍んで、度々、わしの御主人を邸へ訪ねて来られた。

それがまた、朝倉家譜代ふだいの者の眼には、何か意味ありげに映つて、よけい猜疑さいぎな眼で視られた。

「小人という者ほど始末の悪い者はない」

金ヶ崎城からお退がりになる度、御主人の血色には、我慢が抑えられていた。わしは多年、奉公したので、御気質もわかつてるが、日頃は女性のようにお優しく、そして事理明白な頭脳を持つておられるが、非常な癩癖かんぺきが内につつまれていた。学問と修心とで、その天性を、悪いと自覚して抑えているだけに、そうした時のお顔色は、酒に弱い者が悪酔わるよいした時のように青かった。

だが、わしが、

「藤孝様がお越しになられました」

と、取次ぐと、そんな折でも、

「おう。渡らせられたか」

と、いちどに愁^{うれ}いも払われて、御自身、ずかずかと、式台まで出て、

「ようこそ」

と、別人のように晴々と、お迎えになるのが常だった。

お二人は実に話がよく合うとみえて、時の移るのも忘れている。その話がまた、実に多方面で該^{がい}博^{はく}なのに驚かされる。藤孝殿はいつも口癖に、

「どうしてこんな文化の低い地方に、貴方のような都にも稀^{まれ}なる知識人がいるのか」

と、よくいわれた。

わけて国学についての話題がよく出た。細川殿は和歌の道に造^ぞ詣^{うけい}が深かった。美術、文学、天文、兵学、そして時事を談じ、一転して、食味のはなしや、笛、蹴鞠^{けまり}の事、流行の連歌の評やら——殆ど尽くるを知らなかった。

「時に、……今日は」

と、その日に限って、細川殿はあまり弾^{はず}まず、声を密^{ひそ}めて、何か折入つての相談があるらしかったが、侍坐^{じざ}しているわしを憚^{はば}か^かれて、ちよつと、口を閉じた。

すると御主人は、わしへちらと目をくれた。

「仔細ない腹心の者でござりますゆえ、お案じなく」

といった。

では——と安心したように、細川殿は口をひらいて、

「当国の朝倉殿も、あのような態^{てい}では、天下の霸業^{はぎよう}などという

大事の相手には心^{こころ}許^{もと}ない。——というて、何処^{いずこ}を見まわして

も、乱麻^{らんま}の時相、小国は小国なりに、大国は大国なりに、足もと

の鬭争のみに追われている時代。……抑^{そもそも}、今の武将のうちに、一

体、誰を力に、將軍家を頼み参らすべきか。藤孝もともと困^{こう}じ果

ててござる。隔意^{かくい}のない御意見もあらば、聞かせて戴きたいもの

であるが」

いうと、光秀様は、膝を正して、

「真実、そのお志ならば、不肖^{ふしょう}光秀が、再び牢人いたして、密^{ひそ}かにお使いいたしてもようござるが」

「して御意中の人とは」

「小国なれど、尾張の織田上総介^{かずさのすけ}信長公。あのお方を除いては、今、大事を語る武将はござりませぬ」

いつの間に、観ていたのだろう。信長公の偉材である事や、尾張の国の地勢と将来性が、やがて大を成すに違いないという事を、光秀様は、あらゆる角度から観て力説なされた。

「ううむ。……成程」

細川殿も、うめきながら、炯々^{けいけい}と眸をかがやかして、終始、

熱心に耳を傾けていた。

三

それからの事は、^{つまび}審らかに話せば、余りに長い事になりすぎる。
御主人の開運は、まさしく、信長公にお目にかかった時からだ
った。

いうまでもなく、義昭將軍の旨を^{むね}含み、細川殿の使いとなつて、
岐阜城へ臨んだのが、御縁であつた。父、道三を討つて、威をほ
しいままにした斎藤義龍の稲葉山の城も、すでに亡んで岐阜城と
名も^{あらた}革まり、そこにはもう信長公が君臨していたのである。

光秀様は、時に、三十九歳であつた。

以来、信長公に仕えて、わしの御主人も、

「今度こそ、働く処を得た」

と、欣ばれ、信長公にも、

「よいやつを見出した」

と、お覚えも殊のほか良いとか、いつも洩れ聞いていた。

一躍、織田家の士隊長したいちようを仰せ付かつたのを見ても、いかに重

用されたかが分ろう。

それからの、光秀様の戦歴もまた、輝かしいものであつた。

永禄十年二月には、滝川一益かずますの軍に従ついて、北国を討伐し、

上木うえき、持福きまた、木股などの城を降し。——十一年には、池田勝政の

池田城を陥しいれ、十二年には、丹波へ討入っている。

げんき
元龜元年となつては。

わかさ
若狭へ転戦し、続いて、天正元年には、柴田勝家と合体して、

しが
滋賀の石山、堅田など、一向宗の僧軍と戦うなど——殆ど、年ご

との正月にも、かつちゆう 甲 冑を解いて、とそざけ 屠蘇酒を祝った例はないとい

つても、過言ではない程だった。

「働く処を得た」

と、おっしゃっていた通り、わしの御主人も、実によく職に尽されたが、信長公も実によく光秀様の才能を、やくろう 薬籠中のものでして、お使いなされたものと思う。

誰にも疲れは来る——。

また、立身なされば、自然、立身した心にもなる。

ふと、その疲れを、亀山のお城に休めて、今と越し方を顧みれば、ぼうぼう茫々十七年、ひげ髭にはもう白いものの交じる五十五歳の御自身を見出して、夢のようにも思われたであろう。

が、今は。

夢ではない。丹波一国を領して、身は亀山の城に君臨し、位階は従五位下、族をこれとう惟任と改め、ひゆうがのかみ日向守に任官なされて、天下の府、安土あづち奉行衆の一席をも占めておられる。——まったく、何度も繰返すようだが、昔を思えば、夢のような御出世である。

おまえ見たかや

お城のにわに

今が桔梗きぎようの

さかり頃――

御城下の田や山で、この頃よくきく歌は、光秀様の善政を謳歌おうかし、明智家の開運を祝ことほぐ声だった。実際、領内の御政治は、非難のしようもないほど、行届いて、平和に盈みちていた。

けれど、光秀様の顔いろには、お疲れが濃くなつた。淋しい山陰の一本桔梗ひととききようのように、いつも愁うれいに鬱ふさいでいた。

――何事があつたのだろうか？

家臣は誰も思つた。

しかし、誰も深くは察しなかつた。

越前穴馬あなうまざい在の御牢人時代から、お側を離れた事のないわしに

至るまでが、不覚にも御主人のお胸のうちを、最後の最後に来るまで知らなかった。——いや時には、不審と思われない事もないではなかったが、決して感情を素で現わさない御気質ではあり、家臣どもには、お胸に炎をつつんでも、そういう時ほど、優しくなされる方なので、まったく、^{うかが}窺い知る術もなかつたのである。

びつちゆうこう
備中行

一

忘れもしない。それは天正十年の五月の末だった。たしか二十

七日の晩かと覚えている。

御主人には、愛宕山あたごの西坊へ登られ、その夜、威徳院で連歌の会を催された。

光秀様の歌道は、細川藤孝（幽斎ゆうさい）殿と、御姻戚ごいんせきの間からとなつてからは、なおさら、研鑽けんさんの深いものがあり、かつて、滋賀の唐崎からさきに松を植えられて、その折、

われならで誰かは植えん

ひとつ松

心してふけ

滋賀の浦かぜ

と詠じた歌などは、公卿くげたちの間にも秀歌と伝えられて、「や

さしき武士もののふ」^{はや}といい囃されたものだつた。

御主人は、「やさしき武士」であつたろうか。わしは後になつて考えても、光秀様の心ほど、今以て解らないものはない。

一見澄みきつた深い淵のような気質と思う。いや深いか浅いかすら覗かせない所があつた。^{あお}蒼黒い深淵のなかには、どんなぬしが棲すんでいるか、凡慮ぼんりよには測り知ることができなかつた。

愛宕山の連歌の会では、紹巴しょうはの次韻じいんをうけて、

時は今天あめが下知さつきる五月哉

と、詠よまれたそうで、後では皆が、すでにその時の会には、光秀様の胸の深淵に、恐ろしいぬしが叛逆の口を怒らせていたのじやと、是々非々、噂し合つたが、それもこれも、及ばぬ後の事で

しかない。

それから、亀山城へお帰りになった六月朔日ついたちの晩、御主人には、にわか遽にお従兄弟いとこの左馬之介光春様を、お召になった。

お会いになる前に、御主人には、いつになく硬ぼった顔いろで、
「孫平治。——寄れ、近う」

と、わしを側へ引かれ、

「光春とはなしがある。その間、何人なんびとも寄せてはならぬぞ。よう見張っておれ」

わしは意外に思った。

例のない事だ。日常、礼儀作法のやかましいお方が、いかにお従兄弟いとこの仲とはいえ、蚊帳かやの中にはいつて、しきりと、密談遊ば

しているのだった。

そのくせ。

二、三度、激越なるお声がもれた。光春様のお声も、感情にふるえておいでになった。わしは、あた辺りへ近づく人間を見張るより、おんとぼり御帳の裡のおはなしに全神経を奪とられてしまった。わしの足は、がたがた顫ふるえ、唇くちの色もなかったろうと思われる。

「出陣。出陣っ」

「先鋒せんぽう。——荷駄隊、用意」

星の白い真夜半まよなかだった。

組々の士隊長は、お城の土坡どはに立って、法螺ほらのような声で怒鳴った。

が——それには、誰も驚きあわてるはずもない。既に夜の出陣は、知れ渡っている事である。

昨年来、信長公の命をうけて、御幕下の将校、羽柴筑前守秀吉はしばは、中国に攻め入って、この春以来、備中びつちゅう高松城の清水宗むねは治るの頑強な抵抗に、いとめられ、遠征の軍馬は、攻めあぐねている態ていであつた。

その秀吉から信長へ、願わくば君公の本営を進めて、御威光の督選とくせんあらんことを、要請していた。

わしの御主人は、その先鋒として、中国へ出陣を申しつかつていたので既に、行軍の準備は一切手落ちなくできていた。

城門が開かれると、真夜半まよなかの亀山の町々の上へ、出陣の貝が、

長い息をひいて鳴って行つた。

辻々には、赤々と、篝火かがりびが燃えて、国主の出陣を見送る領民

が、眠りもせず土下座していた。

蜿蜒えんえんと、軍馬は、東へ向つて流れて行つた。

「……？」

お留守居組のわしは、その長い列の行く手を、お城の土坡どはから見送っていた。とめどなく流れる涙も拭わず見送っていた。

「ああ、厭いやな空だ……。怖ろしい雲の形ぎようそう相だ。明日あすのこの世はどうなる事やら？」

思わず、空を仰いで、わしは嘆息した。あしたの天変地異を今夜の今知っている者は、あの出陣列に従って行つた御家来衆も数あ

多^{また}ながら、わしひとりしかなかったのである。

——怖ろしくて、胸が動悸^{どうき}して、わしは、どうしても、寝つかれなかった。

二

なぜお止めしなかったか。死を賭^としてまでも、なぜ諫^{かんげん}言しなかったか。

臆病者、不忠者。

わしは、わしを責めて、怖ろしさと苦しみと、二重の悩みに、輾^{てん}転^{てん}と悶^{もだ}えた。

寢床についてから、わずか半刻はんときばかりが、十年の苦悶にも思われて長かった。

「そうだ。今からでも」

わしは、がばと、寢具を蹴つて、厩うまやから馬を曳き出した。

城門の番士には、

「殿様が御持薬ごじやくの咳薬せきぐすりを、お忘れになつたから、追いかけて、お渡ししてくる」

と、作り事をいい、駒に鞭むちをあてて、出陣の列を追つて行つた。その晩のわしは、まったく捨身すてみだった。田も畑も街道も見えなかった。ただ真つ暗な五月さつきやみ闇の雲の断れ目きめに、ぴかぴかと大きく光る星だけが、何かの凶兆のように眼に映つた。

桂川^{かつらがわ}

の流れを越えると、京はもう間近にそこの山上から指さされる。幸いにも、わしはそこで御主人に追いついた。

軍馬は、山の頂で、一息ついていたのである。しかし、その馬の嘶^{いなな}きも将士の顔も、士気も、亀山の城を出た時とはちがつて、一度に騒々^{さわさわ}殺氣立っていた。

「お忘れ物を届けに参りました。お目通りを願いたいです」

いつもなら、わしの顔だけで、取次を待たずとも許されるのが、味方のわしまでを、将士の血ばしった眼は、疑わしげにぎらぎら見つめて、

「成らぬ」とか、

「しばらく待て——」とか、さんさん立騒^{あげく}いだ挙句、やつと、御

主人の床しょうぎ几の前まで通るのを許された。

光秀様のまわりには、同族の左馬之介さまのすけ光春様を始め、溝尾茂みぞおしげと

朝、御牧兼顕みまきかねあき、斎藤内蔵助くらのすけ、村越三十郎、天野源右衛門、

そのほか老臣旗本たちが、甲かつちゆう冑きゆうに身をかため、爛らんらん々と恐い

眼をそろえて、楯たてを並べたように、そこを囲んでいた。

「孫平治か。何で参った。——忘れ物とてないはずだが」

わしは、御主人の前へは出たが、しばらく、口がきけなかった。息も切れていたが、口に出すのも、恐ろしい事だったのである。

「たわけめが。何を顛ふるえておる。はやく申せつ。もはや、夜明けが間近い」

びーんと、耳を刺すような声に、焦いらいら々とした癩かんしゃく癩くがこもつ

ていた。わしはかえって、御主人のその烈しいものに引出されて、

「お、おそれながら、……暫時、暫時、お人ばらいの程を」

いうと、御主人は、くわつと、まなじり 眦を裂くようなお顔で、

「何、人払いと。そちは、忘れ物を届けに来たのではないな！」

「は……はい」

「おのれ。……人払いなどして、何をこの光秀に申そうというのか。いえ。ぬかしおれ。人払いには及ばん」

「死、死を賭して、参ってござりまする。……孫平治が、生涯のお願いを」

「生涯の願いだと。ふふム……さてはおのれ、宵に、光春との密談を、ぬすみ聞きしおったの」

御主人はいつて、体じゆうに、かつて、人に見せた事もない昂たかぶりを顫ふるわせながら、京の方を指さしていわれた。

「わが兵馬は、備中へは向わぬのだ。わが敵は、本能寺にある。

——そう光秀は今、ここで全軍へ宣言したところだ。人ばらいなど無用。申したい儀があらば大声でいえつ」

三

たとえ、御主君に対してであろうと、わしは正しい事をいうのだ。お諫いさめするのだ。天に代つて声を放つのだ。

そういう気持が、途端に、わしの声を胸から衝つき出した。夢中

で申し上げた。

「あなた様には、天魔が魅入みいったのでござりますか。信長公へ対していかような御憤怒、御不満、また忍び難いものがござりましようとも、虚きよを衝ついて御主君を討ち奉るなどとは、天人共にゆるさぬ大逆——」

いいかけると、御主人には、はつたとわしを睨みつけて、

「孫平治。ぬかすなッ」

「いや申します。申さいでは……」

「黙れっ。黙れっ」

わしは、物狂いとも見えよう様な血相よくして、

「聞かれませい！ 孫平治の口をかりて、天があなた様へ申すの

でござりますぞつ。あなたは、お若い時から、万卷の書を読んだ！　じゃが、あの書のたった一行にでも、主君を弑しいぎやく逆さかしてもよいと申す文字がございましたか。またあなた様は、生来の御聡明じゃ。その理智の見分けに細やかで鋭いお眼は、他人の些細な非行たりとも、決して見逃しはなく、眉をひそめられる方じゃ。時勢を眺めてもその通り、常に御批判の正しいお方じゃ。——それが、それが、御自身……」

声つまらせると、

「黙らぬか、下郎っ」

無法な声を出されて、御主君には、床しょうぎ几を立ち、やにわにわしを足蹴あしげにしかけたゆえ、わしはお手討と、はや観念の眼を閉じ

ながら、具足の脚元へお縋^{すが}り申して、

「黙りませぬ。主君を害し、人道に反^{そむ}いた武士が、古今を通じて、一人たりとも身を無事に終っておりましようか。近くは、あなた様も、その眼にまざまざと見ておいでなされましよう。斎藤山城守殿の末期はどうでございましたか。稲葉山の義龍殿は、何たる浅ましい滅亡を曝^{さら}した事でござりましようぞ。——現にあなた様御自身も、その業火に取巻かれ、その地獄から遁^{のが}れて、正道の御修養をなされたればこそ、今日の御身分も築き得たものではございませぬか。——人間を観る眼、時勢を観る眼を、人すぐれてお持ちのあなた様が、いかに逆上されているとは申せ、御自身を観る眼を、そこまで、盲目におなりなされてしもうたとは、この孫平

治には信じられませぬ、万巻の書も、かくては、あなたに取つて、何のお役にも立たぬものでした。いえ、かえつて、智恵ぶかい大悪人を作つたようなものです。孫平治如きは、今なお、一冊の聖いけん賢の書もよう読みませぬが、それでも、この御国の上においては、忠孝二つを踏み外しては、天道も人道もない事ぐらいは、よわきまう弁えておりまする」

「うるさい。うるさい。下司げすめが、まだ吠ほえおるか。……ええ、時遅れては大事を逸いつす。源右衛門、こやつを、引離せ」

お旗本の天野源右衛門は、わしの襟がみを掴んで叩きつけ、
「大事を知つた奴、血祭りに」

と、槍を持直した。

が——御主人は、

「ア。待て」

と叫ばれたようだった。けれど源右衛門の槍は、氣早く、わしの体突き刺していた。わしはひとついいながら蹴つ立った。その弾^{はず}みと、源右衛門の槍の力に撥^はねられて、わしの体は、後ろの崖^{すべ}へ勢いよく迂^{すべ}り込んだ。

四

わしはすぐ氣がついた。——と思っていたが、事實は、一^{いつ}刻^{とき}以上も、崖の途中に、仮死の姿でぶら下がっていたものであろう。

槍は、深股ふかももの辺を、突き貫ぬいていた。ひどく出血はしたが、生命いのちは取りとめた。痛みなどは、少しも覚えなかった。

お床しょうぎ凡のあつた以前の頂まで、わしは懸命に這い上がって来た。——だがそこには暗い木々が山巒さんらんに嘯うそぶいているだけだった。

「……う、わっ？」

わしは四山の眠りを驚かすような大声を突然揚げて、無意識に両手を宙へ振廻した。

どんなに驚いても、哭ないても、及びつかないものを見た。まさに、京都の空である。ぼうと一面に真ッ赤なのだ。

赤い夜霧の中に、さらに一際ひとときわ赤く、ちらちらと、屋根の波から火を吐いている箇所がある——

「本能寺だ！」

わしは、恐ろしさに、髪の毛が逆立った。

人間の世の地獄変！

わしの老母^{おふくろ}も、あの火に焼かれたのだ。わしの前身も、あの

黒煙から道を踏み迷ったのだ。

非を悔いてから既に二十余年。わしが再びそんな魔道に落ちぬ

のも、養うて下さる御主人のお庇^{かげ}と常に思っていたら——その才^さ

謀^{いぼう}学識の人のいしばい優れている御主人が、地獄の火放^{ひつ}けをなさ

れようとは。いうも恐ろしい反逆の狂兵を駆り立てなさろうとは。

ぞつと、身慄^{みふる}いを覚えた時、わしは一瞬^{いつとき}に世の中が厭^{いや}になっ

た。所詮、この世というものは、学識ある者も、教養のない者も、

食える者も、食えない者も、一様に皆つづまるところ餓鬼^{がき}の寄合
いか。外道悪鬼の遊び場か。ふと、そんな気がして、死のうと思
った。

わしは坐りこんで、脇差の柄に、手までかけた。

……すると。その時ふと。

わしの心が、死に向って、しいんと冷たく澄みきったせい
か、ふしぎな憶い出が頭にのぼって来た。

二十余年前の——稲葉山の牢内に蠢^{うごめ}いていた自分の姿だった。
蜘蛛^{くもろく}六だの何だのの影だった。またその中に交じっていた猿めい
た顔をした針売りの小男だった。

あの時も、死を考えた。

あの牢も、今のこの山の頂のように、真つ暗だった。

そんな暗合が、ふと、遠い記憶をわしに呼び起させたのであるうか。わしは、

「ああ、その時の猿殿にも、ついあれ以来会う折もなく過ぎて来てしまった……」

と、呟いた。猿殿は、いつも陽気で明るかった。猿殿の体からは、常に陽気が発しているように見えた。太陽とか、天道とか、よくいった。知らず知らず暗闇くらやみの人間にも希望を抱かせた。

「そ！……そうだ……」

わしは、猿殿にお目にかかる日が、その天道のお導きで、今こそ、到来したのだ——と、刹那せつなに考えた。

そう感じると、わしの前に、あの牢獄の切窓から、闇の床へ、一尺ほど映した太陽のように――救いの光がくわつと胸へ甦^{よみがえ}つて来た。

わしは、血のとまらない深股の槍傷の穴へ、土を詰めこんだ。そしてぎりぎり布で縛^{ぬの}りつけ、そこらの生木を切つて杖とした。よろめきながら、わしは歩き出した。光秀様は、丹波境^{ざかい}のこの峠を東に向つて、本能寺に殺到したが、わしは西へ降^{くだ}つて備中路へ指して行つたのである。

空はまもなく薄^{うす}浅^あ黄^{さぎ}に明けて来たが、団々たる雲のちぎれ間を、赤い煙が這い、太陽は鉛のように黒かった。

道を急ぐわしの後には、洛中洛外の騒動が、目に見えるような

ここちがした。地獄の物音が耳についてならなかった。

さみだれ陣

一

二十余年のあいだ、わしは闇の中で別れた猿殿の事を、一日たりと、忘れた事はない。

だが、主人持ちの身には、私の暇は一日もなかった。御主人が貧困時代は貧困に追われて。御主人が出世なされば、わしの勤めも共に重くなつて。

が、心ひそかに、猿殿との再会は心がけていたので、その後、猿殿が何人^{なんびと}であるか、どう暮しているかは、会わなくとも、よく知っていた。

——あの成り上がり者が。根は、中村の土百姓、足輕の果て木下弥右衛門の子ではないか。

——それが今では、羽柴筑前守の、秀吉のと。長浜の城主から、また、姫路城へおさまって。とか。

——運の強い猿ではある。いかに才^{さい}長けた、戦^{いくさ}上手の男とはいえ。とか。

——ちと、君^{くん}寵^{ちよう}も過ぎよう。というと、あいつに逆^{さか}らった者、なぜか、みな亡びておる。何しても、うるさい猿面。とか。

こうした類の噂は、近ごろ、いや数年も前から、年ごとによく聞くことで、光秀様におかれても何かにつけて、

（猿めが）

と、いう事は、よく口に出されたのを、わしも側で聞いていた。だが最初のほどは、よもや近ごろ隠れもない織田家の御幕下の猿面殿が遠い以前、稲葉山の牢で、わしの見知っているあの猿殿と一つ人間であらうなどとは——どうしても考えられなかった。

しかしその疑いは、過去の彼と、現在の彼との、形や身分を較べるからで、素すの人間だけとして考えてみれば、光秀様にしても、穴馬ぎい在の貧困時代に誰が今日あることを想像もしよう。

猿殿の御素姓や、幼名なども、あの折、おぼろに聞き覚えてい

たわしは、近ごろ、惑星視されている羽柴筑前守殿こそ、わしの知っているお方に紛まぎれない——とやがて知って、懐かしや、一度は会あうて沁しみ々と、昔語りをなどと思つてみたが、先の地位も地位、こちらとの関係も関係、それと常に、戦陣から戦陣へ、席の温まる間もないお方——主人持ちのわしの身にも暇はないし——つい思いつつ幾いくとせ年かを過ぎて来たわけだった。

けれど、今こそ、そんな小さな私わたくしごと事でなく、天下の大事を齎もたらして、猿殿にお会いできる日に行き着いた。

いや、お会いする事を楽しんで、それも私事になる。わしは悲壮な考えと、大乘的な決意とを固めて、丹波境から東した御主人とは反対に、西へさして、道を急いでいるのである。

微塵^{みじん}、この間に、私心をうごかしてはいない。神仏御照覧あれ。わしは御主人を裏切るのでもない、身一つの落着きを見つげに行くでもない。ただ、平凡な人道を真つ直ぐに歩んで行こうとするだけだ。この国の闇が二年、三年と続くものを、一日もはやく、修羅^{しゆら}から救い、同時に御主人の惡逆無道の狂乱をも、苦患^{くげん}の底からお助けしたい——と念じるしか考えていないのである。

二

さて。

わしは六月朔^{ついたち}日の未明から歩き続け、夜の目も眠らず、六月

三日の夕刻には猿殿の御陣所——備中高松城の寄手よせての戦場間近くたどり着いていた。

「うさんな奴。どこへ行く」

「城方の使いであろうが」

わしは、八幡山やわたやまの木戸で、寄手の歩哨ほしやうにすぐ捕えられた。

元より、本望の事と、驚きもせず、わしの両腕ねを捻じ上げた兵たちへ、声高に訴えた。

「うさんな者でございませぬ。大事をお告げ申すために、丹波表より夜の目も眠らずに來た者でござる。逐一ちくいちは、筑前様へ直じきじきでなければ申されませぬ。他ほかでは寸言も吐きませぬ。何とぞ、大将のおん前へ、引つ立てて戴きとうござる。縄付でなりと、お

恨みは仕りませぬ」

わしはそういつて、自分の両手を後ろへ廻し、神妙の態をまず見せた。

この辺りは、浮田秀家様の陣地だった。急に伝令が駆けつけた。子。間もなくわしの身柄は、七名の槍囲いに監視され、羽柴秀長殿の陣所を通つて、石井山の御本陣まで連れて行かれた。

三

風のたよりに、高松陣の難攻は、丹波表でも聞いていたが、わしは途々ここの攻略の仰山な備え立てに吃驚した。

かえるはな

蛙ヶ鼻から石井山の中腹の御本陣へと登ってゆくと、いやでも、

大規模な戦場の全地域が目の下に展ひらかれてくる。

それが皆、いちめんの泥湖どろうみではあるまいか。

わしも旅の間、降り通されて来たが、ここも梅雨つゆの長雨で足守

川、長野川などの河川は氾濫はんらんするばかりであつた。それを、こ

の石井山の南端から、大きな円形を描いたように、長さ二十八町

二十間という堤どてを築いて囲み、川水を落して、大きな泥湖どろうみを作

りあげているのである。その湖の真ん中に、ぽちと、沈みかけて

いる楼船のような城が浮いていた。敵の高松城はそれなのである。

毛利家の被官ひかん、清水長左衛門宗治むねはるが、わずか五千の士卒や農兵

と共に、餓死がししてもと、死守している敵城なのであつた。

猿殿の総軍は、約三万とか。

その大軍が、四月中旬ごろから、田圃たんぼのなかの小城一つへ、攻めかかって、二回の総攻撃も功を奏せず、殆ど、手を焼いてしまったため——最後の一策として、水攻めを計画したものである。

が、落ちないのだ。

城にはもう、一つぶの米、飲む水すらも、ないと知れきっている。

それでも、泥湖どろうみの中の浮城うきしろは、寄手が近づけば、わつと反撥はんぱつする。死にもの狂いになって戦う。物を食っている兵よりも強いのだ。

わしも、後で聞いた事だが――

思慮の深い寄手の大将猿殿には、力づくでこの小城を落そうとすれば、敵に何倍する死傷を、寄手も出すに違いないと見たとの事で、その為こういう策を用いたものらしい。

毛利家には、もとなり元就の家訓があつた。城を築く時、土台石に、その家訓を刻ませた。

百万一心。

の四文字だと聞いている。

猿殿は、それを知っていたのだろう。水攻めと、糧道を断つ、この二つで攻めた。けれど城兵の、五千一心、は六月にはいつても、陥落しなかった。

表面、包囲形を作つて、三万の大軍は、ひしひしと詰めていたが、寄手にも、隠しきれない焦躁しょうそうがあつた。——それは、毛利方の吉川きつかわ元春、小早川こばやかわ隆景の四万の兵が、援軍として、すぐ対岸の山岳までもう来て対陣しているからである。

しかし、その援軍も、この広汎こうはんな泥水をながめては、手も出せなかつた。——そして刻々と、実に刻々のうちに、城兵五千の餓死は迫つていたのだつた。

はなしが前後したが、わしが石井山御本陣へ曳ひかれた黄昏たそがれは、そういう際きわどい戦局の危機であつた。心なしか、暮れかけている泥湖どろうみの水の光も、孤城の影も、何となく寂じやくとして、雨の霽はれ間まを身に迫る湿しめっぽい風が蕭々しょうしょうと吹き渡つていた。

持宝院というお寺に着いた。

御陣所のすぐ下だ。

「坐れっ」

という声を浴びて、わしは本堂の階段の真ん前の大地へ坐つていた。

濡れた陣幕が、本堂の蔀しとみめぐを繞めぐっていた。夕風の来るたび、大きな桐の紋がゆらゆらと動いて、そこらの桜若葉から、青光りする毛虫だの雫しずくが、廻廊へも、わしの背へも、降りかかった。

程なく――。

手燭てしよくの光が映さした。その光も、風にまたたいて、ひどく揺れうごく。七名ほどのお旗本が、廻廊の杉戸からずかずか来て、わ

しの頭からじつと見た。黙って、両側に控える。その中央に、黒くろぬり塗の床しょうぎ几が置かれた。

四

……ああ。やっぱりこの人だ！

わしは、正面の床几に腰かけた四十四、五歳かと思われる大将の顔を仰いで、途端に、胸のうちで叫んだ。

猿殿は、細い目から、キラとわしを見て、

「丹波表の者か」

と、いった。

「はっ」

喉にからんで、声もよく出なかった。

猿殿は、つづいて、

「何用？」

と、訊ねた。

わしが、お人払いをというのと、無造作に顎あごを左右へうごかした。
具足や太刀の響きが、たちまち、消えて行つた。

「誰もいない。用をいえ」

「急……急の大変を……お知らせに駆けつけました」

「そちは、誰の家来だ」

「明智殿の側近う仕えて来た者でござります」

「名は……?」

まさきまごへいじ
「榎木孫平治と申しまする」

「……?」

わしも、うかといったが、まさか猿殿におかれても、二十余年前にたつた一度聞いた獄人の名などを、記憶しておられるはずはなからうと思つていた。

と——猿殿は、手の軍扇ぐんせんを、少しあげて、わしの顔をさしまねき、

「上がれ」

「は……?」

「階段を上がって来い。ゆるす。もそつと側へ来い」

わしが、おどおど恟々とお脚あしもと元間近まで、はい上がってゆくと、
びしやりと、猿殿はわしの背中を鉄扇で一つ叩いていわれた。

「……ろうがしら牢頭」

「えっ」

「なぜもつと早く訪ねて来なかったのだ」

「……あッ。で、では手前の事をまだ、お覚えで……」

「あんな事は、生涯にも何度とはない。覚えておる。そしてその折、一度はきつと会うといったそちが——生れ変って出たか、死んだか——気にかけておった」

「か、かたじけのうござりまするっ」

わしは、廻廊へ額ぬかずいて、咽むせび泣いてしまった。

「その後、明智殿へ隨身して来たか」

「はい……」

「人間になってよかったな」

「御恩……一日も忘れた事はござりませぬが」

「それだけで満足」

「遂に、今日という機おりが参りました」

「いつかは、会うものだな。宿縁というものじやろ。めでたい」

「――が、今日は、私わたくしごと事で駄けつけたのではございませぬ。

御主人の明智殿事、いかなる天魔に魅入みいられましたか、先ごろ、

信長公より中国へ御出陣の仰せをうけ、六月朔ついたち日の夜半、丹波

境まで勢揃いして御発向なされましたところ、途中、遽にわかに号令を

変えられて、勿体なくも、本能寺に御宿泊中の……」

「ア。これ」

軍扇の骨が、冷やりと、わしの頬を抑えた。

「孫平治」

「……は、はいっ」

必死の訴えを、途中で折られたので、わしの呼吸は肋骨のあばらのうちで、でどころ出所を失ったように喘ぎ廻った。

「そちは、それをいうな。いつてはならん」

「……では、明智殿の叛逆を、もう御存知でござりますか」

「たった今、京の長谷川宗仁そうにんの急使をうけ、仔細、聞いたばかりじゃ。……不愼ふびんながら、使いの男は、雪隠せっちんで刺し殺した。敵

へ洩れてはならぬからだ」

「……………」

わしは、そうあるはずと思いながらも、何か、張りつめて来た一心が崩れて、茫然となった。

「牢頭。——として置こう。よう訪ねてくれた。そちの性しょう骨ぼね

は、秀吉よく知っておる。雪隠へ連れ込んで殺すにもあたるまい。けれど、ここはもう帰れぬぞ。——京都と中国筋のあいだは、何なんぴと

人も通行さすなど、たった今手配をいいつけたばかりじゃ。…陣中なれど、遊んでゆけ」

返事をする間もない。

猿殿は、廻廊の彼方へ向い、

「おいよ、誰か来い」

と、呼んだ。

お旗本の衆が来てすぐひざまずいた。猿殿はわしの肩を、また、軍扇で気軽に叩いて、こういわれた。

「^{ひょう}剽げた男じやろ。こんなところへ訪ねて来おった。これはわたしと同じ村の生れでな、^{ふるなじみ}古馴染染の男じや。どこぞへ置いて、^{いたわ}魴つてやってくれ」

湖心の扇

秘密を知っているということは恐い。その秘密が大きいほど恐ろしさも大きい。

戦場は、遮断しゃだんされている。その中で、敵も味方もまったく知らないことを、わし独りが知っているかと思うと、堪らない恐ろしさに時々襲われた。

わしより一足前に、飛報を持って京都から来たという密使は、それを知っているばかりに、役目を済ますとすぐ、雪隠で刺殺されたというではないか。

が、猿殿は、昔の誼よしみを思つてか、わしの根性を知ってくれてか、わしを殺さずに遊んでおれという。

それだけに、わしは身の恐ろしさにわなな顫く。

わしは、持宝院の一室に、ぺたつと、坐ったきりでいた。決して勝手に立たなかつた。小用へ行くにも、次の間へ断つて行つた。次の間には、片桐助作という若い侍が、わしの接待としてついていた。

現に、助作殿が、

「お酒など、いかがですか」

と、聞いてくれたが、

「滅めつそう相もない」

と、わしは辞退した。

朝になると、

「この寺の庭は、なかなか宜よろしゅうござる。御自由に御見物なされ」

と、いったが、もちろん、立つ気がなかった。

庭先を、武者が通れば、わしは眼をつぶった。助作殿のほか、誰に何をいわれても、決して口はきくまいとまで、慎つつしんでいた。

めずらしく青空が見えた。

陽が照ると、急に夏を覚える。若葉の隙間から、赤く濁った泥どろみ湖が見晴らされた。

城が見える。水に囲まれた悲壮な城は、ここから眺めると実に小さい。五千の人間が立籠たてこもっていらるだろうかと疑えるほど、小さなものだった。

凄まじい濁流の渦が、その小城を呑まんず勢いで大きな輪を描

いている。きのうきよの夕方から較べても、水は一尺も減つてはいないらしい。いや刻々増しているのではあるまいか。石垣も見えぬ。外曲輪そとぐるわの塀の腰まで浸つかっている。あの分では、おそらく城内も池だろうと思いやられる。

「あの中には生きている人間がいる。——五千人もいる？」
ふしぎな気がした。

何で生きていられるのかとふしぎに打たれるのである。

まったく糧道りようどうを断たれてからもう三十日以上にもなるとい

う。それなのに、沈みかけている水城の上には、生氣みなぎが漲みなぎっているのだ。そこに少しの危なげな悲鳴もない。

百万一心。

わしは毛利家の家訓を思い出して、その力だと領いた。湖中の城は、そのことばを思う時、荒海の巖いわおのように見えた。

二

「だが……どうなさるだろう」

わしに取っても、その城が、容易におちそうもないことは、少なからず、不安だった。

なぜならば、この城が陥おちない限り、羽柴秀吉以下の軍勢は、退きも進みもならないからだ。

その間に、都にあつては、叛逆者の一夜將軍、これとうひゆうがのか惟任日向守が、地盤をかため、この世に、あるべからざる世の中を創つくり出してしまふかも知れない。

また、当然考えられることは、光秀方から密使を派して、毛利方と盟約をむすび、秀吉の遠征軍を、東西から挟撃してしまうという戦法もある。

いずれにしろ、長途の戦い出先に、突然、主君の信長公を失つた三万の秀吉軍は、あの水中の小城以上、今は危ない岐路きろにある。——しかも京の大変が、吉川きつかわ、小早川の陣へ、ちらとでも聞えたが最後、山つなみの押すように、毛利方は勢いを得て、こちらの浮足を衝ついて来ることも、目に見えている。

「……どうなさるだろう。猿殿は？」

すべては、猿殿の胸三寸にかかっていることだが、わしもそう案じないではいられなかった。

夜来、石井山の御本陣では、別だんの変りもなかった。にわか遽に、兵が動くでもなく、動揺の氣ぶりなど、微塵みじんも窺うかがわれない。

しかし早朝にどこかへ、使者らしい騎馬武者が出て行つた。

また、安国寺の僧、恵瓊えけいという者が、午ひるまえだけで、二度も御本陣を訪れた。

夕刻にも、また見えた。

その最後の訪問には、何かの都合で、御本陣が使用されず、恵瓊殿には持宝院の客殿に通されて、秀吉殿以下の者と会見された

ので、わしは計らずも、壁ごしに薄々様子を知ることができた。
果然。

石井山の御本陣では、その日、たった一日のうちに、恐ろしく
迅い、そして強引な、外交的機略を活潑にしていたものであった。
恵瓊は、講和の使者だった。

それより前に、毛利方から和睦わぼくの使いに立てられて、

——中国五カ国の譲渡。

——高松城の包囲解除。

——城将清水宗むねはる治の助命。

を条件として交渉に来ていたものだったが、猿殿には、すでに、
信長公へ援軍の申し入れをしてあった折なので、

「和議をいたそう。しかし中国五カ国を譲渡すること。城将清水宗治の首差し出すこと。人質ひとじちを送ること。この三カ条は、譲歩するわけにまいらぬ」

と、突っ放しておられたものである。

が、今朝の急使は、それきり見えない恵瓊殿えけいを、石井山から迎えにやったものらしい。その際、恵瓊殿に対して、猿殿がどんな利をくらわせたか、どう別な意味に、彼を抱きこんだかは知れないが、とにかく恵瓊殿は、

「飢餓きがに迫る城内五千の生命を救えることなら、僧として、身命を賭としても、和議のお仲立ち仕りましょう」

と敵の吉川、小早川の陣と、石井山の御本陣との間を。――ま

た、城方の方へも、数回往復して、折衝せつしょうに努め、日も暮れごろに迫つて、ようやく、和議の調印という運びにまで、漕ぎつけたのであつた。

結果は、双方の互譲ごじょうとなつて、

一 中国五カ国の譲渡。

一 城将、清水長左衛門宗治の自決。

の二箇条で、解決を見たのだつた。

調印が済む。

恵瓊を始め、使者たちがぞろぞろ帰る。その気配をわしは壁越しにほぼ覺さとつて、初めてほつとした。同時に、猿殿が今日あることのふしぎが、苦もなく解けた。

夜が明ける――

翌四日の朝、巳みの刻こくには、もう城将の清水宗治は、舟を湖心へ出して、敵味方の見まもる中で、城兵五千の生命になり代つて、見事な自刃を遂げていた。

三

わしはこの眼で、その朝の有様を、持宝院の一室から、目撃していた。

前代未聞な割腹かつぶくである。

また、明智殿の叛逆で、出牢以来、信じていた現世への考えを、

いちどに覆くつがえされ、暗澹あんたんと世を見失つて、

(この世は鬼修羅おにしゆらの住み場か)

と、呪のろい、何人なんびとをも信じられなくなった心へ、再び、

(否いなとよ。牢獄の闇にも、陽は映さしたではないか。正大な天道の下には、この世ほど潔きよく気高い所はなく、人間程すうごん崇ぜん巖び善美なものはないのだ)

という信念を、固く持ち直させてくれたことでもあるので、余事ながら、その朝の模様をすこし記しるしておこう。

元々、清水長左衛門宗治殿という武もの士のふは、骨まで香かんばしいお人だったに違いない。こんどの講和に際しても、

「主家毛利家の御安泰を。城内五千の部下の生命いのちが、身一つに代

えられて助かるものならば」

と、冷ややかに、敵方の条件を受け容れられたものだという。

三十余日の籠城の間に、城主を始め、将士は皆、木の根や葉まで食べていた。——しかしその朝は、城内隈なく、掃除をさせ、自身は静かに天主に上り、衣服を正し、髪をなで、それが終ると、氣長に毛拔で髯ひげを抜いていたそうである。

時刻が来ると、兄の月清げつせい入道やら軍師の末近左衛門などに送られ、水に浸ひたった城門の際から、小舟へ乗り移る——。その際、家臣ふたりまで、

（御先途を）

と、刺ちがし交えて殉死じゅんししたとある。

舟は、静かに棹^{さお}さして、湖心へすすんで来た。——と、赤い小旗^{へやさぎ}を舳^へに立てた一艘が、秀吉殿の御陣からも漕ぎ出した。

それには、堀尾茂助^{もすけよしはる}吉晴どのが、検視として、乗って行かれた。

（秀吉公よりの御贈り物でござる）

と、検視の舟からは、一荷^{いっか}の酒が、移された。

宗治は、慇懃^{いんぎん}に、

（御芳志。心ゆくまで、戴^{いただ}くでござろう）

と、侍臣とともに、悠々、杯を交^かわしていたが、やがて、舟中に立ち上がって、

（よい心地になり申してござる。さらば、この世の名残に、一^{ひと}さ

し舞^もうて——)

と、自身、朗々と謡いながら、誓願寺の曲を、舞い終った。

石井山の御本陣を始め、敵も味方も、一^{いつとき}瞬^{さざなみ}、小波も立たぬ

ほどひそまり返って、泥水の大湖の中に、閃^{ひら}—閃—と舞いうごく
波の扇を見まもっていたのである。

そのお人の姿が、やがて、小舟のうちに坐って、がくと、俯^うつ
伏^ふして見えたかと思うと、

「ああ——」

という嘆^{ためいき}息が、敵の山からも、味方の山からも、思わず揚が
って、湖の水までが、どうと岸边にうごいて来た。

わしも、その一瞬ばかりは、後々まで、ひとみに深く焦^やきつけ

られて忘れることができなかった。

が——刻々にも、大きく動いている時の相は、すがたわしのような者の詠嘆のために、いつまでも、同じ光景を呈してはおかない。

石井山の御本陣へ、宗治殿のお首が、抱えられて来たと思うと、殆どすぐだった。

「よしつ。堤を断れき」

猿殿のお声は、わしのいた辺りまで聞えて来た。

断乎たる命令の一下。堤は断られて、百八十八町歩に漲り湛えみなぎたたられていた水は、新しい大河を作って、凄まじい勢いを呈しながら氾濫はんらんし始めた。

同じ、御本陣を中心に——お味方の羽柴秀長殿の陣、蜂須賀彦はちすか

右衛門殿の陣、福島正則殿の陣、浮田秀家殿の陣、黒田官兵衛殿の陣——そのほか旗差物はたさしもののひらめく所、野といわず、山といわず、畑、林といわず、到る所から一斉に、引揚げの貝が鳴りひびいた。御本陣から吹きならす貝の音に応じて、各所の貝の音が答えつつ、全軍三万の兵は、堤を断きつた水脚みずあしのように、踵きびすを回かえして動き始めたのであつた。

これとうたいじふ
惟任退治譜

「殿つ。殿つ……」

わしは持宝院の一室から駈け出していた。

猿殿のお姿を見かけたからである。

騎馬に召され、白地きんらん金欄の陣羽織に、具足は萌黄もえぎの緘おどし、革かわど

胴うは真つ黒な漆うるしぬり塗はくに箔を置き、長やかな太刀たち佩はいて――

ひよいと、わしの声に、馬上から振向かれた。

「おつ、お願いでござります」

わしはわれを忘れて、お馬の口輪へしがみついた。旗本方が、

「退すされっ」

と、叱ったのは、耳にあつたが、わしのその時の捨身はばを阻み得

なかった。

「お……。いたのか孫平治」

猿殿の眼は、何用かとわしへ聞いていた。わしは、きのうから今日までに、ほんとに生涯の腹が極つていた。——が、金色こんじきのせんなりひさご千成瓢せんなりひさごや、甲かつちゅう胃かいの猿殿を、仰ぐのも眼が痛く、怪しく声は打ちふるえていた。

「おねがいです。てまえに、槍一本お与え下さい。——さなくば、お馬の口取りになと、お召抱えください」

「隨身したいか」

「出世を望みませぬ」

「何を望む」

「……………」

いえなかった。

猿殿がこれから馳せ向おうとする戦場は分っている。その敵へ、わしはぶつかかりたいのだ。——だが、その敵は、わしの旧主でもあった。

だから、何を望んで、と問われても、口にいえなかった。いえない苦しさが、涙になりかけた。

「……真まことの、真の人間に……武士に成り遂げたいのでござります」
やっといった。それだけでいい尽してはいないが、懸命でいった。

「よかろう」

猿殿は、後ろを見て、従者の槍へ片手をのばした。その槍を取

つて、わしの前へ、石突いしづきを向けて渡された。

「つかわす」

「では……」

「てがら手功をせよ。大きな出世を望むがいい。今を措おいてまたとない

ぞ」

「あ、ありがたく存じまする」

「――が、そちには、秀吉が目ざす敵は突けまい。馬の口輪を持
て」

「……………」

意気地がない。どうしてこうわしも意気地がなくなつたのか、
涙があふれて仕方がなかった。

思えばわしももう年だ。二日も無性ぶしようしていれば、顎あごにまばら

な白いものがキラつく年だ。死に場所が大事だと思う。それにはこのお方の馬の口輪から迷はぐれないことだと思ひ極めたのである。

「気の弱い奴。老いたな」

猿殿には笑われながら、はや馬を進め出していた。

わしはあわてて、お後を慕い、それからまるで、疾風に巻かれて駆けている心地だった。

全軍は備前に入り、辛からかわ川村で各部隊の進路を決めた。

猿殿には、お旗本と手兵のみを率いて、全軍と別れ、矢坂越えから岡山を経、一気に沼の城まで急いだ。

途中の難儀は、いうまでもなかった。わけて福岡の川渡しは、

雨後の大水であつたが、猿殿には、御自身先に越えて堤に立ち、次々に、繰渡る人数へ、呶鳴つておられた。

「こぼすなよ。取落すなよ。かような時には、人ひとり失うても、平時の五百三百の損にもあたる。荷物一荷いっかは、百荷にも当るぞ。敵にも、あわてたりと、笑わるるものじや。心して渡れよ」

わしはもうお側から離れずにいたが、叱咤しったを聞くにつけ、自分の生命いのちも、可惜あたら、むだな所では取落すまいと思つた事だつた。

殿しんがりの森勘八どのは、ここで御人数に追いついた。そして、

「もう、御安堵ごあんどなされませ。仰せの如く、十二、三カ所も、堤を切つて立退きましたれば、毛利方の軍勢も、追ひ来る術すべはございませぬ」

と、報告した。

けれど、次の日、また次の日も、夜を日についで、わしたちの行軍は急ぎに急いだ。

二

後で思い合せれば。

敵の追撃がないと分りきった後もなお、急ぎに急いでおられたのは、高松陣から踵きびすめぐを回らすと同時に、猿殿のお胸では、まだ戦わぬうちから、逆臣光秀の軍とすでに戦っておられたのである。こうして。

わたたちの兵馬は、西片上の浜べから、船へ移つて、赤穂^{あこう}に上陸し、七日の午頃、姫路城へ行き着いた。

迅かった。

わしらでさえも、ふしぎに思う。どうしてあんな大軍が、こう風の如く動かせるものかと。

清水宗治の自刃が行われたのは、四日の午^{ひる}まえだった。吉川、小早川の敵方へ、信長の死が伝わったのは、わずかそれから数時間の後——同日の午下がり頃だったと、後で聞いた事だった。

しまった！

と、毛利方では、齒がみをしたにちがいない。

どうとうと渦巻く濁流の後にはもう、敵の一兵も見えなかった

のだ。どんなに地だんだを踏んだ事か。しかし、余りに小気味よく計られては、無念というも、かえつて愚かと覺つたであらう。それはそうと。

まる二日二晩、ぶつ通しに行軍しつづけた軍馬は、途中、強雨でみずや出水にも会い、泥のように疲れて、姫路城の内外にあふれた。

姫路城は、猿殿が、故信長公から賜たまうていたところの、居城であり、家庭であつた。

「お歸りなされませ」

「御凱旋ごがいせん。おつつがもなく」

「ご祝着に存じ上げます」

留守居衆が出揃うて、大玄関にお迎えした。御凱旋ということ

ばは、猿殿のお胸にそつた事ではない。だが、にこやかに、少し軽々しい程、にこやかに、

「やあ。やあ」

誰彼となく、いちいちうなず頷きを与えられて、泥具足のまま式台に踏み上がられ、そこですぐ聞いておられた。

「母君には、秀吉が留守の間も、お達者でおられたか。御機嫌はよいか」

「おすこやかにいらせられまする」

留守居衆の一人、こいではりまのかみ小出播磨守が答えると、

「女房どもは」

「お変りものう」

「そうか。いやそうか」

猿殿は、それを聞いて、長途の疲れも忘れた面持であつた。

「すぐ、湯殿へ通ろうか。この態——この戦い^{てい}窶^{やつ}れのまま、母君のおん前へ出ては、どこぞ体でも悪いように、母君がお案じなさろうで」

戦場では、さして気づかなかつたが、平和な城のお住いへ来てみると、猿殿のお声は、話よりも大きく、どこまでも聞えてくる。大廊下をずかずかと、曲りかけられたが、急に思い出されたように、

「武蔵守、武蔵守」

お台所御用人、三好武蔵守を呼びたてて、

「食うぞ、食うぞ、きようは兵どもも。つわもの炊事方、やっておるか」

「致しておりまする」

「まだまだ、後より続々と到着するが——」

「薪と大釜のあらん限り炊いかしでおりますれば、御人数分は」

「たのむぞ」

「畏れ多いことをおそ」

「久しゅう、戦場では、脂あぶらもの物に飢えておる者ばかりじゃ。な

お、行くてには、より以上な大難関が待つておる。魚鳥の肉など、ある限り城下より集め、足輕の末にまで、ふんだんに与えてくれ
い」

「心得ましてござります」

猿殿には、もう湯殿の杉戸を開けている。いちいち人手を待たないので、小姓たちはかえつて天手古舞うのであった。具足を脱いで、ずしりと置くと、乾いた泥がこぼれ落ちる。

湯もまた早い。

どこを洗ったでもなく、たちまち真つ赤になって出て来られた。鎧よろい下したの肌着だけはお代えになったが、具足は、新しい物がそこへ取揃えてあるにかかわらず、風雨によごれた古い方を着込んで、

「小姓」

と、滴したたる襟の汗を拭いながら吩咐いいつけた。

「出陣は、明早朝と——表方の者に触れるように、すぐ伝えてお

け」

湯殿の次の揚屋に腰打ちかけたまま、さらに、あげや金奉行を呼びにやられた。

「いくらある。城内の蓄えは」

金奉行は、即答して、

「銀子七百五十貫、金子八百余枚ほどござりまする」

「それを皆、蜂須賀彦右衛門に渡せ。——彦右衛門の手より、番んがしら頭、弓、鉄砲、槍の者、小荷駄、足輕どもへまで、知行に応じて、残らず分配せいと申せ。——秀吉の手許に、一分一厘も残しておくに及ばぬぞ」

そこへ、奥の侍女こしもとが来て、

「御母堂さまが、一刻いつときの間も早う、御無事のお顔見たいと、待ちかねておいでなされますが」

「おお今参る。……もう暫しばしと、母君を皆してお宥なだめしておいてくれい」

金奉行が退さがるついでに、附けてやった蔵奉行くらがもうそこへ来て控えていた。

腰かけたまま、籠手脛こてすねあて当の紐など、左右から小姓に結ばせながら、

「蔵米は何程あるか」

「八万五千石の記帳と相成っておりまする」

「うむ、八万……」

猿殿には、ちよつと胸算には積れないらしく、無造作にこういつた。

「今日から大晦日おおみそかまでの分とし——日ごろ、扶持ふち取る者どもに、扶持高、五倍増しにして頒わけ与えい」

「……と。御陣先の、兵糧はいかがなされますか」

「兵糧は無用。こんどの戦場は、食い物の多い所とほぼ知れてい
る。——それよりは、後に残る弓、鉄砲の足軽小者の妻子どもに、
煎せんじ茶の一ぱいもゆるりと飲ませてくれたが増し……。心得たか」
「はっ」

それで、風呂の中でした考え事は、すべて、附け終つたらしく
ある。猿殿は、さもさも、爽すがすが々したように、奥へ急いで通られ

た。

三

道をちがえて、続々と引揚げて来た各部隊は、大手、中門のあたり、二の曲輪くるわから、御本丸の広場にまで、満ち満ちていた。

久しぶりに脂あぶらの浮あいている汁しる椀わんと、にぎり飯とを両手に持つて、兵たちは、明日あすの空あいを眺めていた。

夕雲が赤かった。梅雨つゆも霽あがろう。どこか風もさばさばと感じられる。ふと、開け放たれているお広間を窺うかがうと、猿殿は、御舎弟の秀長様とお揃そろいで、御母堂の前に出られ、何か笑い興じながら、

兵と同じような粗末なお菜で、湯漬^{ゆづけ}を食^{あが}っているのだった。

「久しぶりよの」

御母堂も、箸をとっておられた。秀長様も御相伴^{ごしやうばん}している。開^あけ放^{はな}つてあるので、彼方で兵が食べているのも見えるし、兵の方からも見通しなのである。

こういう有様は、わしはこの大名方の家庭でも見た例がない。思い出すも胸が痛むが、光秀殿などは殊^いさらに厭^{いと}う事である。眉をひそめて、下賤^{げせん}というに違いない。

だが、猿殿のお姿からは、下賤^{げせん}などという感じを受ける前に、美しさ自由さを感じる人間の姿のほうが先へ迫ってくる。わしは物蔭^{ものかげ}から、茫然と見とれていた。

「戦、^{いくさ} また戦と、留守がちでござれば、母君にも、間には、お寂^{さび}しゆうございましょう。お歌は、ちつとは、進みましたかな。舞など、稀 《たまたま》には御覧なされまするか」

「勿体ないこと、そなたが戦場に臥^ふしてあると思えば」

「そんな御遠慮は、わが子に御無用なこと。妻のおすすめが、不^ふ束^{つか}なのでござりましょう」

「あれには、ようして賜^たもるに、なぜ其方^{そなた}は賞^ほめておやりなさらぬ。よしないことを」

「はははは。母君その辺、お案じはいりませぬな。女房には蔭でいうもの。のう、秀長」

「ははは。そうかも知れませぬ」

「美味^{うま}い。こうして戴く、湯漬の味はかくべつ。……ここへ戻れば、母君とも二夜三夜は、甘えていとうなるが、楽しみは後のこと。またしばらくはおさびしくも、御機嫌よう留守をたのみまする」

「すぐにまた、御出陣か」

「されば、明け方にも」

「やれのう、御苦勞なことではある。わしはよいが、彼妻^{あれ}は名残も惜しかろうに、なぜここへ政所^{まん}殿は呼んであげなさらぬ」

「会いたい妻は、足輕どもも持つておりますで、ここは我慢のしどころかと。——あははは、彼女^{あれ}にも、悪う思うなど、母君からよう申しおいて下され」

笑っているそのお口で、先刻、猿殿は御留守居衆のこいではりまの小出播磨守かみどのや、三好武蔵守どのを集めて、こう正直に告げておられた。

（敵は強兵じゃ。逆賊とはいえ、光秀もわしを邀むかえたら、その一戦が彼のわかれ目じゃ。光秀の智謀才識、到底秀吉の遠く及ぶところでない。わしはただ順逆を学び、天道を奉じ、亡君の弔合戦とむらいぞという捨身があるばかり。もしこの一戦に、秀吉討死と聞えたなら、母も妻も、そちらの手で、潔いさぎよう処置してくれい。城は火となし、小屋一棟も焼き残すなよ）

それを、伝え聞いた将も兵も、みな血を沸たぎらせて、瞼まぶたを熱くした様子である。その猿殿のお胸のう치를思い、湯漬を共に食あがりな

がら、出陣までの半夜を、母に侍して機嫌を取っておられるのを見ると、わしは事もなげなその笑い声を、他^{よそ}耳^{みみ}に聞いてはいられなかった。

同時にわしの欣びは裏書された。——このお方のためというては狭いが、このお方が喜びを整理し支配してくれたら、世の中は明るく強く美しく、真の平和になろうと信じられた。その馬前に死ぬことは、無駄でないと心を固めさせられた。

わしのみではあるまい。

恐らく、三万の将兵は、みな等しい気持を誓っていたに違いない。

まよなか
真夜半を過ぎると——

早くも一番貝が鳴る。二番貝が鳴る。

陣列、馬揃い。そしてほどなく、先鋒の部隊から、徐々じよじよに、

東へさして進軍しはじめた。

大手口の欄干らんかん橋に、床几しょうぎをすえて、猿殿は、出陣隊伍を閲え

兵つべいしておられた。

ざく、ざく、ざく……

足なみは、一糸みだれぬ音を刻み、猿殿の前を無限に流れて行く。

死に場所へ。

死に場所へと。

だが、その前には、やがて播磨灘はりまなだの闇をひらいて、大きくさ

し昇る太陽の祝福が燦^{さん}としてあつた。

死に場所へ。死に場所へ。

わしも大股に隊伍の中に交じつて歩いた。真に生きんがために、
大地を踏みしめて歩いた。

青空文庫情報

底本：「柳生月影抄 名作短編集（二）」吉川英治歴史時代文庫、
講談社

1990（平成2）年9月11日第1刷発行

2007（平成19）年4月20日第12刷発行

初出：「週刊朝日 創刊一千号記念特別号」

1939（昭和14）年

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

茶漬三略

吉川英治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>